

佛滅度の後の世に
一切世間の眼なり
説かば一切天人の

よくその義趣を知る者は
怖畏の世によく須臾の間も
供養を應くる福あらん

第二十章

第二十章 大願堅固の鑑、提婆達多救記さる

大願堅固と須要なる一此語は第
十九章第五項にあり。

大智慧一六達中布施を十分に行
ふには群の五達智慧まで達せね
ばならぬ。檀王は大智慧を達せ
んとの大願を成した。

一 佛は諸の菩薩及天人四衆に告げたまふ。「我今持經者大願堅固と須要なるを
告げし、その龜鑑一例を語らん。過去無量劫中、大國王あり、須頭檀王と名く、
大願を發して、心退轉せざりき。初め六達道を満足せんとて、布施を勤行し、
象馬、七珍、國城、妻子、奴婢、僕從、頭目、髓腦、身肉、手足を捨ます、軀命をもなほ惜まざり
しが。この功德に依り、國內は財寶充滿し、人民は壽命無量なりき。されど檀
王は財寶の多きと壽命の長きとは、未だ以て眞に民を安むるに足らずとし、更
に福祉を増進し、無窮に維持することを得んがため、先づ自ら大智慧を成就す

大願堅固の位を成して、大願堅固の王
位を成し、王位は天竺の如き神
國と善法を以て、一種の成功者
時、佛の教を以て代名詞く、
善であるがその善業に苦せぬは
善い業に成つて居る。況んや檀
王は政治は善く國民生活を立派
にしたこと、なほ一層の福祉を思
ひだす事したので決して國民を
捨てたものではなし。

身を以て奉事一奉事事は取りも
返さず大願堅固持證の行で得
た、その結果は佛し、
法を證するを得たことは新し、
其業は水くみ仕へてせし
（大願堅固行巻）
千歳に満ち、
仙人の目のむしみに身をかくて
いかに千歳を生き忍ぶらん
（摩訶波利經）

へきことを悟り、ひたすら無上法を求めき。榮華の位を捨て、政を太子に委ね、
城を出で、鼓を撃ち、四方に令して曰く、「もしよくわがために無上の法を説か
ん者あらば、我は師事して身を終るまで、供給走使するを厭はじ」と。仙人あ
り阿私と曰ふ。來つて王に告げけるは、「我に大法あり、蓮華經と名く。その中
に無上覺の道はありべし。王もし違背せざれば、我汝がために説かん」と。檀
王はこの言を聞いて歡喜踊躍し、直に仙人に隨ひ、所須を悉く供給しき。果を
とり、水を汲み、薪を拾ひ、食を設け、或は身を以て牀座となし、身心倦むこ
となく、常に奉事すること千歳に満ちて、なほ法のため精勤給侍し、乏しき所
なからしめしかば、遂に蓮華經を体得して、佛の大覺を成就し、眞に廣く衆生
を利益し安穩にすることを得たり。

一、今は往昔無量劫
無上の覺を求むるゆゑ
鐘推き鳴し而令して曰く
よくわがために解説せば
富強の國に王ありき
位を捨てて城を出で
誰か大法を知る者よ
奴僕となりてはへんと

二、阿私と名くる仙人あり

我に微妙の教法あり

實相を明し大道を示す

大王もしよく修行せば

三、この善言に歡喜して

木の實草の果薪採り

幾年月も妙法を

四、大國王の福利をば

勤求してこの經を得て

普く衆生を利せんため

來つて王に白ししは

妙法蓮華經と曰ふ

世間に希有のものなるが

汝がために説くべしと

直に阿私を師と頼み

四時の所須を供給して

念ひて倦まず懈らざりき

五欲に須ひず道に回向し

忽ち佛となりたるは

大願堅固の鑑なり

二 「諸の僧よ。その時の大王は我釋迦牟尼佛にして、仙人は今の提婆達多を

り。我は大願堅固に提婆達多を善知識として蓮華經を持ちたればこそ、六達道
慈悲喜捨を完うし、三十二相、八十種好、紫磨金色莊嚴し、十力、四無畏、四攝法
十八勝神通道力を具足し、佛知見を成就して、廣く衆生を濟度することを得た

一

妙法を念ひて、仙人に仕へて善
みと思ふは妙法蓮華經を擇んと
念する實行なり

四、この經を得、蓮華の精靈三位一
心の信念を体察し、人民に五欲
の利を布施する外また精神的の
利をも施した

三

十力、第一、第二に註す
四無畏、一、一切諸無畏

三、説法無畏

四、説法無畏

四攝法、一、攝召して衆生を導く

二、布施攝、三、愛敬攝、
四、利行攝、五、同事攝

利行は行を説く、同事は高ぶら

十八勝、第七、提婆達多に註す

三

善事あり、惡事のある人でも之
を廣く成し、大善事が前後にあ
れば成佛可成である。俗に悪人
成佛と言ふはその意味である。
惡のみでも善いと言ふのではな
い。

奇特なる因縁

ありし提婆達多し仙人を
けふはあまのや人の見らるん

四

この妙法、如何にも妙法である
提婆は大菩薩で阿人も多く、善力
ありしが佛に善力が移るを嫉ん
で大逆害を致した。提婆は罪の
事實あり。今佛はそれを善くす
して住古仙人のために苦しんだ
のは自分の修行の爲の善智悲愍

れ

三 諸の僧よ。提婆達多は前生已に是の如き善事あり。後生は無量劫に巨りて、

法を護り、菩薩を教へ、最後に成佛することを得べし。佛の號を天王如来佛世
尊と曰ひ、世界を天道と名け、在世二十劫、廣く衆生のために妙法を説かん。
現在のわが教の如く、天王佛の教も、無量の衆生に、初め或は聲聞を得させ、
或は緣覺を得させ、後に無上道の心を發させ、不生不滅の信念退轉なく常に精
進させん。天王佛の滅度の後、正法世に住すること二十劫ならん。諸天人は、
七寶の塔、高六十里、縱横四十里なるを起てて、佛の全身の舍利を奉じ、雜華、
栴檀塗香衣服、瓔珞幢幡寶蓋伎樂歌頌を以て供養禮拜せん。感化の効能顯著なる
こと、佛在世に異らざるべし。

四 諸の僧よ。大王が昔、阿私仙を師として成佛し、今還つて提婆達多に授記
すること、豈に奇特なる因縁ならや。將來の善男善女、この妙法を聞いて、
淨心に信敬し、疑惑を生さざらば、假令一旦惡業を造りし者と雖も、地獄餓鬼
畜生に墮ちず、十方の佛前に生れん。また生るる處、常に蓮華を聞くことを得

人だと仰める。從縁への慈悲なり。提婆地下に之を聞いて漸に改悔しろ。

第二十一章

疾得無上佛道一 第十九章偈一三
項に出づ。今之を証せんとす前
章は宿世談するが本章は実濟なり。

大海の龍宮一 諸君驚く勿れ虚空
海會にはこれ位の不思議はいく
らもある。佛の神通力で現出し
たものだ。若し疑ふなら隙限は
ない。例へば此所は靈鷲山の虚
空だ。近所に大海があったのか。
上から見て下か海のやうであつ
たのか。文殊師利は第三番には
佛前に居て彌勒と談をして居た。
何時の間にか海中に現はれたの
か。海底の龍宮より来たと言ふ
が遠慮も覚えたのか。文殊が吾
龍宮より来たと言ふは内に龍
宮より来たと言ふが知るか。など
評議を説き出さず。東洋の大
文學を誦むのには左様な村子定

べし。もし人天の中に在つては、勝妙の樂を受け、もし佛前に在らば蓮華の化
生たるべし。

第二十一章 疾得無上佛道の證

一 多寶佛に隨つて東方の寶洋國より來れる菩薩、その名を智積と曰ふ。師子
座の下より多寶佛に向ひ、「いざさらは本土に還りたまふべし」と白せば、釋迦
牟尼佛は智積菩薩に告げたまふ。「善男子須臾を待て。菩薩あり、文殊師利と名
く、相見えて共に妙法を談せずや。また持經者の疾く無上佛道を得るの實證を
見よ。」

時に、文殊師利菩薩は、千葉の寶蓮華、大さ車輪の如きに坐し、大海の娑竭
羅龍宮より、自然に涌出し、靈鷲山に詣りて、寶蓮華より下り、虚空高く佛前
に至り、釋迦多寶二尊の足下に敬禮し、已つて智積の所に往けり。二菩薩は共
に相慰問し、退いて一方に坐しぬ。

二 智積菩薩は文殊師利に問うて曰く、「仁龍宮に於て教化せる衆生、その數幾
何」。

文殊師利曰く、「その數無量にして、口に宣ふる能はず、心に知り難し。然れ
ども汝須臾を待て、ここに證を示さん」。

言未だ竟らざるに、無數の菩薩が寶蓮華に坐して、海より涌出し、靈鷲山に
詣りて、虚空に住せり。この諸の菩薩は皆文殊師利の所化にして、よく菩薩の
行を具足し、共に六達道を論ず。もと小道を樂みし者も、今は皆大道の行者な
り。

我海中に於て衆生を教化せし事、それ其の如し。

- 智積頌の歌ふ。
 - 一、智徳勇健の文殊師利
 - この會の大衆我等共に
 - 證を見て皆疑なし
 - 二、仁寶相の義を演じ
 - 一佛道を開示して
 - 疾く大覺を成就させん

其の頭ではいけぬ。拘泥せず
に進め優美な劇中を味へ。十八
章以下は佛の口説法でない、
神変実演説法が主と成つて居る。

三 我は海中に於て、常に蓮華經を宣説す。

「この經は深妙にして、諸經の中の寶、世に希なるものなり。海中の衆生勤加精進してこの經を修行し、速に佛となり得るや」。

「娑竭羅龍王の女、畜生なれば愚痴なるべきに、わが説法を聞いて、正直に信受し、年僅に八歳にして、智慧利根、よく衆生の諸根行業を知り、刹那に大道心を發して退轉せず、佛の甚深の秘藏を悉く受持し、深く禪定に入つて諸法を了達し、辯才無礙的陀羅尼を得たり。衆生を慈念すること、母の赤子を思ふが如く、功德具足して、心に思ひ口に演ぶること微妙廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、よく大覺に至れり」。

「我釋迦牟尼佛を見上るに、王者の尊貴を以て、なほ無量劫の間、大願堅固難行苦行、積功累徳し、菩薩の行曾て止息したまはず。三千大千世界の内、芥子一粒許の地も、この菩薩が衆生のために身命を捨てさせられし所ならぬはなし。それ斯の如くして、漸く大覺を成じ得べきなり。我は信せず、龍女が如き卑賤の身にして、須臾の間に正覺を成ぜんとは」。

言未だ訖らざるに、龍王の女忽ち佛前に現れ、低頭敬禮し、退いて一方に坐し、佛を頌の歌ふ。

一、深く罪福の相を知り

徧く十方を照したまふ

微妙の法を御身とし

三十二相八十種好を

具へて莊嚴まします

天人仰ぎ龍人伏し

一切衆生皆宗奉む

二、御名を聞くだに衆生は

疾く佛道を成するなり

かかろいみじき功德により

我が大覺を得しことは

佛のみよく知しめせり

今より一實の教もて

苦の衆生を濟度せん

四 その時に、舍利弗尊者は龍女に詰つて曰く、「汝は少時の間に無上覺を得たりと謂へども、我は信せず。如何となれば、女身は垢穢にして法器にあらず、何ぞよく無上覺を得べけんや。それ佛道は曠遠なり、無量劫勤苦して行を積み、徳を修め、然らば始めて成就し得べきものなり。況んや女人には五障あり、一

五

甚だ疾し。一
 袖のうへの王の光の程もなく
 南の空の月と満むらん(俊成)
 わたつ海の底の主もに宿かりて
 南の空をてらす月影 (定家)
 (以上の歌献上の宝珠の功德で
 成佛せりと思ふ勿れ。信心を
 王に誓ふるなり)
 龍女等正覺を成ず。海龍王経に
 云く龍女作佛國土號光明名號無
 垢證如來云々と蓮華経以外にも
 龍女成佛の談あり。参考に記す
 人の形となり。一 男性女性の別を
 云はず成佛前には人の形の菩薩
 になる。性は女でも宜しい。龍
 女には变成男子とあるがあれ
 は誤譯らしい。サーベントがマ
 ンに成つた蛇が人間に成つたの
 だ。女虫が男虫に成つたのでは
 ない。
 皆遙に見る。一 智積舍利弗の神力
 で見せられた。
 説法懺悟住後記。一 是は入悟示開
 の順序に成つて居る。
 龍女すら。一 虫類で子供でも女
 であれば動物中最も愚ならん。
 それですら持経さへ出来得れば
 忽ち成佛するとの極端な説況ん
 や人間をやこの教なり。庶民の
 ためばかりぢやない吾々の参考

に梵天となることを得ず、二に帝釋となることを得ず、三に魔王となることを得ず、四に轉輪聖王となることを得ず、五に佛身となることを得ず。汝如何で
 加速に成佛し得んや」。

五 時に、龍女が所持の一の寶珠、價三千大千世界なるを、佛に上りしかば、
 佛は即時にそれを受けさせたまひき。

龍女は智積菩薩及舍利弗尊者に謂つて曰く、「我寶珠を献るに、世尊の納受あらせらるること疾からずや」。

「甚だ疾し」。
 「卿等の神力を以て、わが成佛を見よ、更に速ならん」。

龍女は忽ち相貌を變じて、人の形と成り、菩薩の行を具へて、南方の無垢世界に往き、寶蓮華に坐し、等正覺を成じ、三十二相、八十種好あつて、普く十方一切衆生のために、妙法を演説せり。

六 娑婆世界の菩薩、聲聞、天人、非人等皆遙に、彼の佛が普く時會人天のために説法なしたまふに、無量の衆生は法を聞いて解悟し、不退轉に住し、後記を得、

に成る。
 前章高麗の難得とこの車馬易成
 と何れも道理。面白いコントラ
 ストで以て第十九章の佛教の榮
 を徹底せしめらる。

無垢世界の六種に震動するを見て、大に歡喜し、悉く遙に敬禮せり。時に、娑婆世界の三千の衆生は不退轉を得、或は大道心を發し、皆授記されたり。智積菩薩舍利弗尊者及一切の衆生は、幼き龍女すら、蓮華経を受け持ちて、疾く無上佛道を成就し得るを見て、默然として信受しき。

第二十二章

第二十二章 持經誓願

蓮華経を受持。龍女が蓮華経を
 戴したとのみ前してはいけな
 佛を信じて菩薩に觀り一對し、
 法の難得味を知つて敬三寶し
 ことである。簡單な事だが真
 に深く本氣に正意にやつた。
 大恩力を受し云々。一 是は第十
 七章持經訓に答へて居る。但し
 持經訓では世尊の完全なる説
 法命に命懸けありと驚かしは
 ない。
 驚して答はなし。一 折角佛願申出
 つるに、死の毒にも味はてんで
 手にして下さらぬ。何故で荷ら
 うお前達はマ、だと言ふ訳の。

一 國王が大願堅固勤苦精進して蓮華経を求めし妙説と、龍女が蓮華経を受持して疾く成佛せる事審とに依り、一感感激を深めたる藥王菩薩及大樂説菩薩並に二萬の菩薩眷屬等は、持經者勸募の教に答へ上らんとて、共に佛前に誓をなして曰く、「世尊よ、願くば憂慮したまふこと勿れ。我等佛の滅後に於て、誓つて蓮華経を奉持すべし。彼の惡世の衆生は信心うた、少く、増上慢多く、利供養を貪り、不善根を増し、解脱を避忌せん。そを教化せんは難かるべきも、我

薄曇は分つたとしても兼して身に染みて分つて居るが能くも考る分り方ではないか。

他の國土に於て「この娑婆國土に於ては佛十九尊」佛衆に對し正答でない。

三

等は大忍力を起して、この經を受持し、讀誦し、解説書寫し、種々に供養して、身命を惜むまじ。

その時、佛は黙して答はなかりき。

三 衆中授記を得たる五百の阿羅漢は、座より起つて、俱に佛前に合掌禮拜し、「世尊よ。我等は他の國土に到り、廣く蓮華經を説くべし」と誓ふ。また初學了學の聲聞にて、已に授記を得たる八千人も、起立合掌して佛に誓つて曰く、「世尊よ。我等も亦他の國土に於て、廣くこの經を説かん。如何となれば、この娑婆世界は人弊惡多くして敬順の心なく、功德淺薄、瞋濁詭曲なり。そを教化せんは、我等が力及ばぬがゆゑに」

時に、佛はなほ黙して答はなかりき。

三 佛の姨母波闍波提尼僧は、初學了學の尼僧六千人と俱に、座より起つて一心に合掌し、尊願を仰いで目まじろがさりき。

佛は波闍波提尼僧に告げたまふ。「僞曇彌よ。何故に憂色を以て如來を視るや。汝は我が授記の中に、汝等が名の無かりしを心に慍むるなるべし。されど曇曇彌よ。我は先に一切の聲聞に悉く授記すと言へり。汝も亦それに漏れざるなり。汝は將來六萬八千億の佛の法威の下に、常に大法師となり、他の六千の尼僧と俱に菩薩行を究うして、成佛することを得べし。各を一切衆生喜見如來佛世尊と號し、轉次に六千の菩薩に授記するものなり」。

四 羅睺羅の母耶輸陀羅尼僧は、私に思ふやう、「世尊は授記の中に、獨りわが名を擧げたまはず」と。

もれでしははさそ腹みけん
三行末
おぼ空にわかめ光をあま雪の
しほしへこの思ひけるかま
三行末

佛はその心を知しめして、告げたまふ。「耶輸陀羅よ。汝は來世百千萬億の佛の法威の下に、菩薩の行を修め、大法師となり、漸々に佛道を具足し、善國の中に於て依佛すべし。號を具足千億光相如來佛世尊と曰ひ、佛壽は不可思議劫ならん」。

波闍波提尼僧、及耶輸陀羅尼僧、並に眷屬は皆大に歡喜し、未曾有の感激を以て、佛前に歌ふ。

世尊は大慈大悲もて
天人を導き安穩らへたまふ
我等作佛と聞くからに
心にかゝる雲もなし

四

心にかゝる雲もなし
あま雪のはるる空の月影に
恨まむさむきは徳の山
かくばかり心晴れける月影を
こぼ塔山こぼる思ひけん
三行末

四方の國土一足も佛敎に對し正當でない。さすが女人だから弱いのも己むを得ぬ。然し佛の尊意はこの女人等でも餘所に譲り度くはない筈

四方に往還し一足も十方と云ふ此娑婆とは明言せぬ。然し佛で觀るに言ふ事は頗る元氣である。地方にましますとも一十方に往還して居れば其所から眺れば此娑婆は他方である。佛の威力に倚る一言ふ事が元氣一杯なると同時に佛威を尊信するは善聖の精神に叶ふ。大に宜しい。

四方に往還し一足も十方と云ふ此娑婆とは明言せぬ。然し佛で觀るに言ふ事は頗る元氣である。地方にましますとも一十方に往還して居れば其所から眺れば此娑婆は他方である。佛の威力に倚る一言ふ事が元氣一杯なると同時に佛威を尊信するは善聖の精神に叶ふ。大に宜しい。

五 是の如く頌め歌ひ已つて白す。世尊よ。我等は、如來の滅後、せめては他方の國土に於て、廣く蓮華經を宣べ奉らんことを誓ふ。

六 その時に、世尊は八十萬億無數の大菩薩をつくづくと視させり。この諸の菩薩は皆不退の位にあり、常に精進して道を説き、諸の陀羅尼を有し、我こそは持經適任者ならんと、各自自信せり。俱に座より起つて、佛前に到り、一心に合掌し、「世尊がもし我等に持經を許したまはば、我等は誓つて護持し、佛敎に違はず、廣く宣説せんことを期す。然るに佛は今默して命ぜらるることなし、我等如何がすべき」と、念じ已つて、やがて意を決し、師子吼して誓言を發して曰く、「我等は持經者召募の佛意に敬順し、并せて自ら本願を満さんことを希ふ。世尊よ。我等は如來の滅後に於て、十方世界に周旋往返し、よく衆生に、蓮華經を書寫させ、受持させ、讀誦させ、正憶念させ、その義を解させ、法の如く修行さすべし。これ皆佛の威力に倚るべければ、願くば世尊よ。もし他方に在しますとも、遙に守護を賜へ。」

一、教主世尊よ

唯願くば憂慮なく

持經を許させたまへかし

佛の滅後恐怖の世に

我等誓つて説き弘めん

無智なる人の惡口罵言

刀杖瓦石の迫害も

我等皆よく堪へ忍ばん

二、惡世となれば邪智の僧

悟り得願に慢心し

寺院に據りて僧衣を著

口に佛道と言ひながら

心は俗惡非道にて

利養のために説法せん

佛の旨に悖りたる

戲論と知らで世の人は

その惡僧を六通の

羅漢の如くに敬はん

三、かゝる僭聖党を組み

我等を毀ふことあらん

或は利養を貪るとし

或は外道の議論と云ひ

蓮華經は偽作にて

世人を欺き名聞を

求むる人の所爲となし

我等を毀らんためにこそ

かまへてこの經を説く者と

國王大官に讒言し

權門豪族僧衆にまで

我等を誣ることあるとも

四 偈

勇命を授けまじし念中ら下の禱
は行動には多く思ふ事にて身
命を授けまじし念中ら下の禱
四の忍割に遷す可受忍を悲痛
と決心である。抑て道を通る方
法に就ては成道ありや、堪へ忍
ぶといふのみでは不安だが如何
注意。本經中身命惜まぬが他に
四ヶ所あり。本章四は洪養の
ため第九卷第二は慈悲心から
第二十卷四は檀王の所説心か
ら受せる不捨身命であら。此
所は忍ぶに身命惜まぬ必ず加
護あるものと佛を敬信して。

- たゞ一心に佛を念じ
- 我等必ず堪へ忍ばん
- 畏多くも佛前にて
- 我等またよく耐へ忍ばん
- 惡鬼が人の身に入りて
- ひたすら佛を敬信し
- 法師の使命を重んじて
- 衆難を皆よく堪へ忍ばん
- 我等身命を愛むまじ
- 我等の覺悟を知らしめして
- 佛の所囑に副ひまつらん
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 眞實求道の人のため
- 八、眞實求道の人のため
- 九、救を承る上は
- 佛の所囑に副ひまつらん
- 我等は佛の便なり
- 勇んで無上の法説くべし
- 御心安く聞しめせ
- 誠をこむる我等が誓言
- 十、希くば世尊よ
- 十方諸佛の御前にて
- 誠をこむる我等が誓言
- 七、末代濁世の惡僧は
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 六、あはれたが願くば
- 我等の覺悟を知らしめして
- 佛の所囑に副ひまつらん
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 五、濁劫惡世は恐怖多し
- 我等を脅さんときも
- 心に忍辱の證を著
- この御經を説き弘め
- 無上の道を護らんために
- 減後の持經を許したまへ
- 七、末代濁世の惡僧は
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 四、汝等はいみじき佛よと
- なぶり嘲られんときも
- 我等またよく耐へ忍ばん
- 惡鬼が人の身に入りて
- ひたすら佛を敬信し
- 法師の使命を重んじて
- 衆難を皆よく堪へ忍ばん
- 我等身命を愛むまじ
- 我等の覺悟を知らしめして
- 佛の所囑に副ひまつらん
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 三、汝等はいみじき佛よと
- なぶり嘲られんときも
- 我等またよく耐へ忍ばん
- 惡鬼が人の身に入りて
- ひたすら佛を敬信し
- 法師の使命を重んじて
- 衆難を皆よく堪へ忍ばん
- 我等身命を愛むまじ
- 我等の覺悟を知らしめして
- 佛の所囑に副ひまつらん
- 諸佛方便の意を解せず
- 數々所を逐ひ出さん
- 救を念じて皆忍ばん
- 町にも邑にも山里にも
- 二、希くば世尊よ
- 十方諸佛の御前にて
- 誠をこむる我等が誓言
- 一、その時に、佛はなほ黙して答へたまはず、文殊師利菩薩に胸あらせらる。

九、何かは畏るも一初から自分で種
々の道言を思ひ違へ、これを忍ぶ
ことより而して私達恐くありませ
んと近き。悲止にも哀れである。
四、汝等はいみじき佛よと
なぶり嘲られんときも
我等またよく耐へ忍ばん
惡鬼が人の身に入りて
ひたすら佛を敬信し
法師の使命を重んじて
衆難を皆よく堪へ忍ばん
我等身命を愛むまじ
我等の覺悟を知らしめして
佛の所囑に副ひまつらん
諸佛方便の意を解せず
數々所を逐ひ出さん
救を念じて皆忍ばん
町にも邑にも山里にも

第二十三章

是た希持なり一前を嚴持の菩薩
者の如きは皆不退の菩薩ではあ
りき。世も元氣であり色々惡世
に於て、希くば世尊よ。この諸の大菩薩は甚だ奇
特なり。佛意に敬順するがゆゑに、是の如きの大誓言を發し、その情悲壯を極
む。然れども佛滅後の惡世に於て、蓮華經を護持宣説せん者、もし行法宜を得
さらば、人に悩亂さるること多くして、功を奏し難かるべし。世尊よ。菩薩は

第二十三章 勝難行則、髻中明珠の譬諭

一、その時に、文殊師利菩薩は佛に白す。「世尊よ。この諸の大菩薩は甚だ奇
特なり。佛意に敬順するがゆゑに、是の如きの大誓言を發し、その情悲壯を極
む。然れども佛滅後の惡世に於て、蓮華經を護持宣説せん者、もし行法宜を得
さらば、人に悩亂さるること多くして、功を奏し難かるべし。世尊よ。菩薩は

いが騒がれて何ら出来ないやうでは不可敵に暴論を弄ふるも不可。最上等の菩薩には申されぬ。如何なる心得が理想的ならんか問ひし所、文殊は中々眼が高い。

三

行處及親近處。行處は心行き、親近處は親むべきと親むべからざる處。忍辱に住し、第十七章如來の衣

尼提子。外道の一派ジャナ教。種形を食の吾行をする徒。悪律儀。佛の善律儀に對し一言ふ、眼しき振盪の者。

他人を思はぬ。愛憎根性

如何なる則に據つてか、後の惡世に於て、難に勝ちこの經を説き、よく衆生を調伏し得べき。

佛告けたまふ。「菩薩もし後の惡世に於て、安全に蓮華經を説かんと思はば、常に遵守すべき四則あり。

四則の第一は行處及親近處の事なり。文殊師利よ。菩薩は忍辱に住し、柔相善順にして卒暴ならず、心また驚かず、靜に寤相を觀じ、有無差別を行せず、法に偏せず、一切に於て綜合統一的なれ。之を菩薩の行處とす。

また文殊師利よ。菩薩は國王、王子、大臣、官長等、諸の權勢に親むな。婆羅門、尼提子等、外道の徒、俗惡なる文士、享樂主義なる阿世逆世の論客、諸種の凶戲、角力、体術、奇術、變現の者、又は屠殺者、飼畜者、獵漁者等、諸の惡律儀に親むな。是の如きの輩もし來りなば、ために說法せよ。されど自ら求むる心あること勿れ。自己の解脱をのみ思ひて、他人を思はぬ憍俗男女に親むな。挨拶をもせざれ。房中にても經行の庭にても、講堂の中にも、それと同席するな。もし寄り來ることあらば、宜に隨ひて說法し、求むる心あること勿れ。女人に說法すると

無根斷根等。五種の不男と云ふ。女子に對し不護護の弊あり。主れて根こそは無根を以て斷根したるは斷根。婦節を見て婦節起り而も自根節を作さざるは婦節常。性は女性半月女性となるは半月。年少の徒分を畜はす。鴛鴦の亂行を警戒する。又杖卷の義はと心配する。

三

難を凌かん術。第二十三卷最後の菩薩は元氣一杯を善いやうであるが唯堪へ忍ばんを離り返すのみで如何にして堪へるか如何なる行法で凌ぐか、解方針を有つた。また善い。そこで今佛は怒ろに故へたまふ。

きは、女人に欲想を生ずるが如き相をなすべからず。好んで女人を見る勿れ。齒を露して笑はざれ。假令道のためにも親厚すること勿れ。況んや餘事をや。

他家に入りては、小女、處女、寡女等と共に語るな。無根、斷根、妒嫉、變性、半月の男子に親むな。獨り他家に入るな。もし必要あつて獨り入るときは、一心に佛を念ぜよ。また好んで年少の徒弟、沙彌、小兒を畜ふな。平凡なる師に學ばんよりは、寧ろ常に禪定を求めて、閑處に心を修攝せよ。それ一切の法は空なり。如實の相は不顛倒、不動、不退、不轉、固有の性なく、一切言語の道斷ゆ。不生不出、無名無相にして特質なく、無量無邊、無礙無障なり。唯因縁を以て有り、顛倒より生ず。故に菩薩は樂つて是の如きの相に親め。之を菩薩の親近處とす。

一、わが滅度の後の世に

佛道のため身命を

惜まず難に堪へ忍ばんと

持經を願ふ菩薩衆の

心は健氣さりとては

如何なる末代惡世にも

難を凌かん術はあり

二、文殊よ佛の滅度後の

惡嫉多き世の中に

安全にして怖なく
四の則を心せよ
行處を知るぞ須要なる

經を説かんと思ひよは
一には菩薩の親近處と

三、國王、大官、諸權勢

小智に著する空論者
戲笑を好む尼僧衆
女人に親むこと勿れ
菩薩は無畏の心もて
處女、寡女、又は無根男
肉販ぐ人色賣る者
又は諸の婦女等に
屏圍の中に獨りして
もし説く時は戲笑する
弟子を一人將きて行け

博徒、穢多、娑羅門の輩

增慢破戒の似非羅漢
五欲の夢に現なき
もし敬ひて來りなば
求むることなく法を説け
屠兒、餽兒、獵漁、殺生夫
凶險、角力、種々、嬉戲者
すべて親むこと勿れ
女人に説法する勿れ
里に乞食するときは
供する弟子のなき時は

四、

一切一相——法は一切一相、人も
然り、彼此情愛の心なかれ。第十
七章如來の座
閑處に心を持じ、一語説き、思慮
深く、(第二十六章回偈二)

ひたすら佛の加護を念じ

經の一偈も施に答へよ

四、法は性なし虚空の如し

常住もなく起滅もなし
皆顛倒の分別なり
閑處に心を修攝して
須彌の如きを心とせよ

不生不出、不動不退

有無、實非實、生非生は
一切一相と觀じつゝ
安住不動搖なき
これを菩薩の親近處とす
悟の智慧の大中小
これ男、これ女と區別せず
これを菩薩の行處とす

五、行する道の上中下

教の意趣の實非實
諸法を得ざる見ざる知らざる

時に靜に坐禪して

六、菩薩よくこの則を持ち

教の旨を正憶念し
さて後檀門貴族のため
心は安穩く怯懦ならじ
蓮華經を説かん人の

義に随つて理を觀じ

開化演暢して經を説かば
文殊よこれぞ後の世に
勝難行則の初なる

正憶念——大體を綜合遠觀して、
偏執の覺を立てぬ

諸法を得ざる見ざる知らざる——
空に住する、知つてか覺をせぬ、
これ蓮華の三徳

四 誓聞一此所は一般佛弟子の事

四 四則の第二は、言辭を慎む事なり。文殊師利よ。如來の滅後、惡世の中に於て、蓮華經を説かん者は、好んで人及餘經の過を言ふな。また他の法師を輕慢するな。他人の好惡、長短を評するな。誓聞の名を擧げて、その過惡を誹るな。またその美をも稱むるな。人を怨嫌すること勿れ。難問者に對しては、小道に拘泥せず、唯大道の義を以て親切に解説し、努めて佛智に觸れさすを旨とせよ。よく是の如く言辭を慎まば、聽く者皆逆ふことなかるべし。

一、菩薩は言辭を柔軟けて

常に衆心を悦ばせ

樂しく蓮華經を説け

清淨の地に座を設け

齋戒沐浴淨衣を著

心靜に牀に坐し

問に應じて解説せよ

二、僧俗男女貴賤に對し

温顔をもて經を説け

問ふことあらば義に隨ひ

因縁譬諭もて解さ示せ

要は方便して發心させ

次第に心を増益し

引いて佛道に入るるにあり

四信

口に多くを説かんより一晝夜一心に精進す(第二十六卷回向三)

五

忍に安住一徳念堅固大忍辱家二十五卷回向一) 威力強い信念第一 二十二卷回向の如く唯元氣だけで堪へん忍はんと云ふ忍と違ひ 兇猛の如く、之に依つて藉に勝るが杖石の杖石も出にも臨むさるゝことなし、正續にて如來の衣と云へる忍

三、無上の道を説かん者は

懶惰懈怠の想を去り

憂惱を離れ慈心を起し

無量の因縁譬諭をもて

衆生を悉皆歡喜させよ

施す教は多くとも

微塵も求むること勿れ

四、口に多くを説かんより

ひたすら教の意趣を念じ

自ら道を具足して

人の鑑とらばやと

願ふぞ法師の本分にて

安樂大和の供養なる

五、斯くてこの經を解説せば

嫉妬諸惱の障なく

また憂愁なく罵詈もなく

刀杖瓦石の怖畏もなく

所を逐はるる難もなけん

忍に安住するゆゑなり

五 四則の第三は平等尊直の事なり。文殊師利よ。後の惡世に於て、蓮華經を受持し、讀誦せん者は、嫉妬詭詐の心を懷くこと勿れ。道を求むる者を輕蔑し、その長短を詮索するな。誓聞道、緣覺道、若くは菩薩道を學ぶ者に向つて、汝等は放逸なり、懈怠多し、佛道は甚だ遠し、遂に佛慧に達すまじ」と言ひて、

如来に對し菩薩に對し一衆生の一對
若しこれ衆生に對しは一若の菩薩に對し云々を衆に對し云々に取換ふれば即ち菩薩としての一對二になる。

疑惑を生さすな。徒に諸經を論じて、是非を諍ふこと勿れ。如来に對して慈父の想を起し、菩薩に對して大師の想を起し、深心に恭敬禮拜せよ。若しそれ衆生に對しては、大悲を起し、常に平等に法を説け。教に従ふ者に多くし、從はぬ者に少くすること勿れ。假令深く教を愛する者にも、特に多くを説くな。文殊師利よ、之を法師勝難行則の第三とす。

末代惡世に於て、菩薩もし是の如くして蓮華經を説かば、惱亂する者なきのみならず、好き同行者を得て、共に讀誦することあらん。また大衆來つて聽受し、聽受し已つてよく持ち、よく誦し、よく説き、よく書き、若くはよく人に書かせ、經卷に供養し、恭敬尊重讚歎せん。かくて人をも世をも益することを得べきなり。

- 一、佛滅後の持經者は 嫉恚憍慢ある勿れ
常つねに平等に衆生を觀かん 諸經を戲論するなかれ
- 二、汝は成佛すまじと言ひ 人を輕め疑悔を

增長さすること勿れ

一切衆生を慈念して

- 三、衆を憐む心ゆゑ 心柔和によく思ひ
- それを敬ひ大師と思ひ しはしも怠ることなかれ
- 恭謙已を持する習者は 佛を無上の父と思ひ 菩薩は道を行するなり
- 無量の教に敬はれん

佛を無上の父と思ひ！これ我が千五百の言はらまことに思應を仕する。(第二十二卷) 三(傳一)

大悲の心、大悲の心！正論に二、四、衆の第一に書を

六、四則の第四は慈悲警願の事なり。文殊師利よ、末代惡世に於て、蓮華經を受持せん者は、警願を發すべし。在家出家の求道者には、大悲の心を以て授せん、菩薩の心なき人には、大悲の心を以て賜まん。これ等の人は不幸にして如来の隨宜方便の教に値はず、聞かず、知らず、問はず、信せず、解せざるなり。我無上道を成じずば、身は何地に在りとも、神通力智慧力を以て、往いてそれ等を引導し、疾くこの法の功德の中に住せしめん」と。文殊師利よ、之を菩薩勝難行則の第四とす。

如来の滅後ごに於て、蓮華經を説かん者、よく此に留意せば、過失あることな
く、僧俗男女書讀紳士に恭敬尊重讚歎さるべし。虚空の諸天もこの經を聽かん

因偶

慈悲憐愍の心―廣大の慈悲(卷二十六章 因偶三)

かため、常に隨侍せん。もし村落市邑空閑林中にあらんとき、人來りて難問せば、諸天は晝夜に衛護し、よく問者を満足させん。これ蓮華經は一切三世十方の諸佛が神力を以て護念まももさせたまふものなればなり。

一、よく一切を慰むもの　　よくこの經を説き得べし

末代歴世の持經者は　　在家出家の初心者に

慈悲憐愍の心をよせよ

二、蓮華を聞かず信ぜぬは　　如何に不幸の人々ぞ

我速に佛道を得て　　方便力もてそれ等をば

教導せんと祈誓せよ

七 「文殊師利よ。蓮華は無量の國々を尋めるとも、名字だも聞き難し、よく難に勝ち功を成す者にのみ、この法は示さるべし。譬へば、大勢力の轉輪聖王あり。諸國を降伏せんとす。然るに諸の悪王その命に煩はす。聖王即ち幾多の兵を起して討伐す。時に兵衆の戰功あるを見ては、大に喜び、功に隨つて賞し、或は田宅城邑を與へ、或は衣服嚴身具を與へ、或は種々の珍寶金銀瑠璃砗磲碼

因

法の國土を國三界に王たり―全法界の王たり、善惡の三界も治服せしむべからず。

大功勲―總持功あれば涅槃の城を掌するけれども、蓮華の實は大功勲者でなければ授らぬ。死罪難に勝つこと三要する。佛としての一討二處を討伐するは三位一心

磁珎瑠璃珀又は象馬車乘奴婢人民を與ふ。然れども、ただ聖王の頂上警中に秘藏せる明珠は與へず。如何となれば、諸の眷屬は、未だその眞價を知らず、もし與ふるとも、必ず驚き怪むべければなり。文殊師利よ。如來も亦是の如し。禪定智慧の力を以て、法の國土を得、三界に王たり、然るに諸の魔王皆て順伏せず。賢聖の諸將之と戰つて功あれば、如來は歡喜して、四衆の中に於て諸道を説き、その心き悦可し、禪定解脱無漏根力等、諸法の財を與へ、又は涅槃の城を賜ひ、『汝は悟道せり』と言ひて、満足の想を起さすれども、而も蓮華は授けたまはず。文殊師利よ。轉輪聖王の、軍中に勲功第一なる者あるを見ては、始めて甚だ喜んで、久しく警中に秘して妄に人に示さざりし明珠を出して、之に與ふるが如く、如來も亦賢聖軍中に、三界の五陰魔、煩惱魔、死魔と戰つて、三毒を滅し、一切の魔網を破盡し、大功勲を建つる者あるを見ては、大に歡喜して、蓮華を説きたまふ。

文殊師利よ。この大法はよく大道を確立し、衆生を佛智に進ましむるものなり。も、一切世間多惡難信なるがゆゑに、我久しく秘藏せり。長夜に守護して安

然れども一此所の譬論は少な
なりである。本意は持護運囑者
諸格別論であるが譬論中この然
れどもまことに説く運囑を聞く
格を説く。この然れどもより漸
く況説の形で被囑者資格に關し
斷き難し況んや持護をやと成る
のである。

に宣説せざりしを、今汝等がために始めて敷演す。汝等實に得難きを得たり。
然れども文殊師利よ。如來の滅後に於て蓮華經を得て護持せんことは更に難か
るべし。この經は如來の第一の説、諸佛如來の秘密の藏、諸經の中の最上なり。
もし此經護持の運囑を得て、受持し、讀誦し、人のために説かんと思はば、必
ず勝難行則を遵守すべきなり。

一、難きを凌ぐ人にのみ

大勢力の轉輪王

象馬車乘や駭身の具

數多の財寶を興ふれど

勇健にして大敵を破する

二、如來は諸法の王にして

大慈悲を以て世を化する

教に深淺次第あり

諸魔と戰ふ人のため

蓮華持經は運囑まれん

戰功の士を賞するに

田宅城邑、衣服奴婢

譬中秘藏の明珠は

殊勲者にのみ興ふるなり

忍辱の刀智慧の藏あり

意趣に二三はなけれども

解脫を希ふ者の衆生

大方便の力もて

種々の法を説きたまへど

力を揮ひ難に勝ち

蓮華を許さたまふなり

妄に開示せざりしを

わが滅度の後の世に

今の難きに過ぎぬべし

三、憍慢忌嫉多き世に

他人のために説かんとし

憂なく慍なく病なく

賢聖として人に慕はれ

刀杖加へず毒害せず

師子王の如く無畏遊行し

四、夢にも妙なる事を見ん

紫磨金色の御身より

大法は末だ賜はらず

功勲第一の人にのみ

これは教の明珠にて

今汝等がために説く

蓮華の經の得難きは

持つはなほさら難からん

蓮華の經を受持し讀誦し

身口意願の四則に住まは

顔色清く鮮に

天の童子に給侍され

罵詈する人の口を塞ぢ

照る日の如く智慧光明らん

諸佛師子座に坐しまし

光を放ち一切を照し

田傳

師子王の如く無畏遊行し、教の
法を説く時は心裏のり所なし、
二、第二十六卷(四)第(三)

四

夢にも十人に形見をさゆかに學
ばも自分の理屈通りを見る。

- 五、諸法を演説したまふを
衆僧圍繞して聽くと見ん
佛が蓮華を説きたまふに
自身を見れば衆と俱なり
歡喜合掌し佛を供養し
陀羅尼を具へ智慧を増し
恒沙の龍神阿修羅のため
無上の法を演説すれば
佛は我に授記あらせ
善男子よく佛道に入れり
來世は必ず作佛して
國土清淨廣大無比
四衆天神に敬はれ
蓮華を説かんと言ふと見ん
六、または自ら山林に處し
諸の善法を修し
諸法實相を觀するとき
百福莊嚴なるを見ん
七、或は國の王と生れ
宮殿眷屬上妙の樂
一切を捨てて道場に卧き
求道七日師子座に坐し
檀々の因縁譬諭をもて
道を成就し佛習を得
蓮華を以て衆を度し
方便説法廣億劫

六、
深く禪定に入り、十方諸佛を見る！
しづかなる慈愛しめて入ぬれば
みこかたならぬ光をを見る
(優 戒)

第二十四章

三、
この土に留りて、心めて此娑婆
世界と申出づ。然るに恒沙の
人等は他方來の人々である。此土
に留りし、俄かに信はし難し。
止善男子、何時までも佛前に正
答する者が無いからと、うぐこ
んな手に成つた。然し佛行が深
遠に非ざること後に分る。真実
に非ざる所を第十卷に、
一つある。汝か如きは成佛し難
し。此所は汝等は未だ覺悟
も實力も足らぬ。佛前入信を更
せてやるから暫く待ての處なり。
正行直經の隨喜など考ふること

- 八、油盡きて燈の消ゆるが如く
靜に滅度に入ると見ん
蓮華經を受持し讀誦し
勇んで説法する人の
心は安く樂しからん
勝難行の功德あり

第二十四章 無數の大菩薩地中より涌出す

- 一、その時に、他方の國土より來れる、超八恒河沙の大菩薩は、大衆の中に於て起立し、合掌禮拜して白す。「世尊よ。もし佛の滅後、この娑婆世界に於て、勤加精進して、蓮華經を護持讀誦書寫供養せんことを、我等に許されば、我等はこの土に留りて、廣く説くべし」。
- 二、佛告けたまふ。「止みね善男子。汝等がこの經を護持せんこと覺束なし。我が娑婆世界には自ら無量無數の大菩薩あり。この諸人等我が滅度の後に於て、よくこの經を護持讀誦し、廣く説くことを得ん」。

【三】

佛が是の如く諭したまひしとき、娑婆世界の三千大千の國土は、地皆震裂して、中より無量千萬億の菩薩が同時に涌出せり。是等の菩薩は身金色にして、三十二相を具し、無量の光明あり。娑婆世界中、下方虚空に住してありしが、今釋迦牟尼佛が娑婆世界の人中に持經者あるべしと言ふに應じて發來せるものなり。皆大衆唱導の上首にして、六萬恒河沙餘の眷屬を將みたる者六萬恒河沙餘あり。五萬四萬三萬二萬一萬恒河沙の眷屬を將みたる者、乃至一恒河沙、半恒河沙、四分一恒河沙、千萬億無量分一恒河沙の眷屬を將みたる者、又は千萬無量の眷屬、億萬の眷屬、千萬、百萬、一萬、一千、一百乃至五四三二一人の弟子を伴へる者、或は單獨にして遠離の行を樂へる者等、無量無邊なり。各々虚空に昇り、七寶塔の中にまします多寶如來及釋迦牟尼佛の所に到り、足下に禮拜し、また寶樹下師子座上の諸佛に向つて敬禮し、右繞三匝して、合掌恭敬し、菩薩の種々の讚辭を以て、佛を讚歎し上り、已つて一面に擬へ、欣然として二世尊を仰ぎ見ること五十劫なりき。この間、釋迦牟尼佛は默然として、一同を見そなはせり。諸の四衆もまた皆默然たりしが、佛の神力により、この五十劫を僅

【四】

に半日の如く思へり。四衆はまた佛の神力により、他の無量百千萬億の國土にも、各是の如き諸の大菩薩ありて、虚空に徧滿せるを、遙に見ることを得たり。【四】地より涌出せる諸の菩薩の中に四導師あり、一を上行と名け、二を無邊行と名け、三を淨行と名け、四を安立行と名く。衆中の最上首唱導の師なり。各合掌して衆と共に、釋迦牟尼佛を問訊して曰く、「世尊は少病少惱にして安樂に行せらるるや。諸の衆生は教を受くること易きや。世尊は疲勞なきや。」

一、佛は安穩にましますや 病惱少くましますや
 衆生を教化なしたまふに 御疲もましますや
 二、また諸の衆生は よく師教に順ふや
 度しがたきもの多くして 世尊を勞しまつらずや

【五】

佛は尊顯麗しく、諸の菩薩大衆に圍繞されて言ふ。「如是々々、諸の善男子よ。如來は安樂にして病惱なし、諸の衆生は化度し易し、我に疲勞あることなし。この娑婆世界の諸の衆生は、世々已來常にわが教化を受け、我を供養尊重して、諸の善根を種ゑたるものにして、現世にて再び我に値ひ、我が教を聞く

四 如來の智慧に入れり。一佛道に入れり。如來の智慧を獲へたる所の清淨に定住して居る

五 忝さに依頼し地獄を脱せる事より此の方が不思議だ。どうしてこれほど愛情が深いのか。以下二十八章までに解決する

第二十五章

六 未嘗有に驚く。この因縁を解すれば始めて地涌分持菩薩の授記

や、皆直に信受して、よく如來の智慧に入れり。先に小道を習ひて、福なほ少かりし者も、今我に蓮華を聞いて、容易に佛慧に入ることを得たり。

六 諸の大菩薩は頌め歌ふ。

難有や大雄世尊

衆生は佛の甚深の智を

よく問ひ上りよく信じ

教化濟度の難からず

御心安穩くましますは

我等隨喜し上る

七 佛四大菩薩並に諸の上首を稱讃して言はく、「善哉々々、善男子よ。汝等よく如來に隨喜の心を發せり」と。忝さに一同頭を低る。

第二十五章 彌勒菩薩は涌出の菩薩の因縁を問ふ

一 その時に、彌勒菩薩、及八千恒河沙の諸の菩薩は、かくも威儀貴き大菩薩衆が地より涌出して、世尊の前に到り、合掌恭敬して懇に問訊し上り、世尊も

亦親しみ深き御氣色にましますことの未曾有なるに驚けり。彌勒菩薩は合掌して、偈を以て問ひ上る。

一、無量千億の大菩薩

巨身神通、智慧不思議

信念堅固、大忍辱

相好人を敬ばす

何國よりかは來りたる

如何なる因縁ありて集へる

二、各の菩薩の將あたる

眷屬の數無量なり

六萬恒沙の大導師

各六萬恒沙を將あ

俱に佛を供養して

訊ひ侍る風情懷し

五萬恒沙を將あたる

導師の數はなほ多く

四萬、三萬、二萬、一萬

一千、一百、一恒沙

二分、三分、四分の一

億萬分の一恒沙の

弟子を伴ふものはまた

その數更に上に過ぐ

千萬無量、乃至無億

百萬、一萬、千百、十

三、二、一人を伴ふもの

或は單獨なるものは

七 此の經に於て、彌勒菩薩の蓮華を知らず。第一の菩薩は、分の二十六章で少し説き二十八章で最後は解決に成る

その數轉た上に過ぎ
偈に佛所に集れり
恒河沙劫一心に
これ等を數へ盡すまじ

三、この諸の大菩薩は
誰がこの人を教化せし
大精進力威徳あり
誰に従ひて發心し
何てふ經を受け持ち
智慧神通の大菩薩

如何なる道を修めしにや
我等は未だ昔より
何の國の人なるらん
未だ彼等の國を見ず

我等諸國を知りながら
未だ此衆の一人をも識らず
多くの人を知りながら
この諸の大菩薩の

無量徳世尊願くば
衆の疑を決きませ
本末因縁を説き明し

二 十方來の諸佛に侍從せる諸の菩薩もまた、是の如き菩薩大衆が娑婆世界の

本末因縁一何時誰を師とし何故
を習ひ何國に住し何處から來ら
れし何事をする人かと問ふ。昔
し佛の御答が師は未だ昔から娑
婆の主へて侍從資格は已に折紙
付むと云ふ事であれば既に問難
が面倒に成り訳である。

三 偈

地より涌出し、虚空に昇りて、釋迦牟尼佛の所に住せるを見て、各々主の佛に
白す。「世尊よ。この無量無邊不可思議の大菩薩衆は、何所より來りしや」。
諸佛は各侍從に告げたまふ。「善男子暫時待て。彌勒と名くる菩薩釋迦牟尼佛
の信用淺からぬが、已にこの事を問ひ上れり。佛は今答へたまはん、汝等自づ
から聞くことを得べし」。

第二十六章 佛の久遠最初の弟子

第二十六章

一 釋迦牟尼佛は彌勒菩薩に告げたまふ。「善哉々々、彌勒よ。汝よくかゝる大
事を問へり。汝等皆疑念を去り、精進の鎧を被、堅固の心を發して聽け。この
大菩薩衆の地より涌出せる事實は、自づから諸佛の智慧の自在神通力、師子奮
迅力、威猛大勢力を顯發宣示するものなり」。

一、精進して一心なれ 疑惑を起すこと勿れ

諸佛の智慧を々々、愈々佛がお答
に當る非難に大要所である。
佛の御答(四)を疑とし諸佛の智
慧と云ふ者は其深奥微妙の法界
邊無辺の力あることを説いて來
たが汝等今地涌菩薩に問ひ我が
答を聞いたり成る釋佛の智慧は
自在神通力師子奮迅力威猛大勢
力と云ふ事であるが、驚く
勿れ心を落ち着けて聞け。

第二十六章

佛智は思議すること難し

信もて忍に住すべし

二、汝等心を安んぜよ

懼を懐くこと勿れ

昔より未だ聞かざりし

大事を今は聞くを得ん

三、佛に不實の語なし

無量の智慧、未曾有の法の

甚深微妙なることを

淨き心に聴受せよ

二

「彌勒よ。汝等が未だ曾て見ざりし、この無量無數不可思議の大菩薩は、我この娑婆世界に於て無上覺を得し時、最初に我に従ひ、教化調伏され、大道心を發したるものなり。皆この下方虚空の中に住して蓮華を護持し、また諸の經典を讀誦通利し、思惟分別正憶念せり。彌勒よ。この諸の善男子は衆中に於て無用の言説を弄せず、靜處を樂み、常に動行して休息することなし。また人天に依て安堵せず、常に深習を樂んで障礙なく、諸佛の法に安住し、一心に精進して無上慧を求む」。

一、地涌の菩薩は無數劫

常に佛智を修習す

その初め我が所化として

大道心を發せる人

この娑婆世界に於て「本師の全文が佛の言である、その前半は佛との關係を明し、次に佛は勸行精進を促して、後半は勸行精進を促して、佛行者なることを示さる。佛にて一應明かになる。

三

人天に依て一室を待たせられて

四偈

一、佛は無上の父と思ふ。

二、空に住み靜處を樂み大衆を護す。

行處靜處で故の言を正憶念す

難言の事を行す、諸の善法を修

し深く深習智覺に入る

言説樂く思慮深し、言辭を懐む

三、

道法を受け持ち、菩薩は道を行

す平等實道に説き故に

智覺堅固し、智慧智覺の事

心畏るる所なし、獅子王の如く

無畏遊行すへ以上二、三偈共に

勝遊行の事は満足して居る

四、

成帝決定の人々、第二十四章回

に三十二相を具すとあるが實は

佛の人は已に佛現なんであら

その訣は快楽久遠に來多數の弟

子が成就して居るのに最初のお

弟子で未だ云ふ言がない。第

十七章回の如く已に大衆を成就

すれども衆生のために稱して大

菩薩と現したんではないか

五、

疑ふこと勿れ、昔から正法護持

悉くこれわが子なり

二、娑婆世界下方空に住み

靜なる處を樂み

言説樂く思慮深し

三、我が道法を受け持ち

廣大の慈悲智願堅固く

心畏るる所なし

四、我道場に覺り得て

隨いて最初に發心し

成帝決定の人々を

五、汝等疑ふこと勿れ

これ最古參の弟子なるぞ

この大衆を教化せり

常に離著の事を行す

讀誦の大衆を護す

晝夜一心に精進す

微妙の法を説くときは

無上の法を説きし時

疾く不退の境に入り

正法護持の大導師

我は久遠のその言

第二十七章 彌勒菩薩の質疑急なり

疑惑を離す。止善子とやられば、
 疑に於ける持疑者はちやんと有
 ると見せつけられたんだから、疑
 いたのも無理はない。疑に疑惑
 とする事は、疑の言と云ふ点で
 ある。疑が解決されるまではどう
 も、佛のお言葉を疑うては恐縮
 だが、得心が行きかねる。其所
 で彌勒は急質問をする。急質問
 は幸であつた。若し吾人が黙止
 して居たらば、次の第二十八章
 の大説法は聞く機が出来なかつ
 たらう。彌勒と云ふ人は何時も
 質問で功德を立てる。

一 彌勒菩薩、及無數の諸の菩薩は、心に疑惑を増し、思ふやう、今世尊の御
 語を聞き上るに、『世尊が菩提樹下道場に坐し、自ら正覺を成じたまひて後、最
 初にこの衆を教化せられし』とあり。また、『これ等は無數劫已來佛智を修習す、
 世尊は久遠の昔、この衆を教化せられし』とあり。二語異れり、何か實ならん。
 是の如き無量無邊不可思議の大菩薩を教化して、無上道に住させ、成佛決定さ
 することは、固より久遠の功を要するを疑はず。然れども世尊は成道已來未だ
 久しからぬに、もし世尊が成道の後、この衆を初發心させたまひしとせば、こ
 れ久遠なるべからず。如何に信すべきか』と。

彌勒菩薩は、この大事解決せざるは、未代までの憾ならんと思ひ、眞摯の態
 度にて佛に問ひ上る。『世尊よ。如來が釋氏の宮を出で、伽耶城附近の道場に於
 て、成佛したまひてより已來、漸く四十餘年なり。この少時に於て、如何でか

當年を父と呼ぶ。
 いかにして初音は若き驚の
 深き野山の春を告げけん
 (定家)

是の如き大佛事を作し得らるべき。佛の勢力を以てや、佛の功德を以てや。こ
 の大菩薩衆は假令千萬億劫の間敷ふとも、その邊際を知る能はじ。是等は久
 遠の昔、已に他の無量無邊の佛の所に於て、諸の善根を植ゑ、大道に入り、世
 尊に値ひまゐらす以前、久しく清淨の行を修せるものにてはなきか。世尊に
 従つて始めて發心せしとは信じ難し。譬へば、色美しく髪黒く、年二十五の青
 年が、百歳の老人を指して、わが子なりと言ひ、老人も亦青年を父と呼ばば、
 この事信じ難きが如く、佛も亦是の如し。今この大菩薩衆を見れば、無量無邊
 劫以來、佛道を勤行精進したるの相、無量百千萬億の三昧に入出住したるの相、
 大神通の相、慈悲の相、よく諸の方便を知りて、問答に巧なるの相あり。人中
 の賢、一切世間に甚だ希なるものなり。而も今日世尊は自ら成道の後、最初に
 この衆を發心させ、教化示導して無上覺に向はしめたまひしと言ふ。我等は佛
 の語の未だ曾て虚妄なきを知り、佛の知見の一切に通達せることを信ずれども、
 新發意の諸の菩薩は必ずしも然らず。もし佛の滅後に於て、二語を聞いて、迷
 惑して信受せず、破法罪業の因縁をなす者あらば、甚だ愍然なるべし。唯願く

は世尊よ。將來世の諸人のために、解説してこの疑を除かせたまへ。

一、 濁
沼に蓮——印度の荒蕪の野には花も見えず、泥沼に蓮華を見出でた時、非常に清潔なる感を得ず。地涌衆の時に勝れたるを極讃する意

一、この諸の佛子等は

皆神通力ありて

よく菩薩の行を具し

一切世間の俗に茶ます

沼に蓮の花盛る

二、しかもその數限なく

一時に地より涌き出でて

御前にまゐりて畏れば

世尊は歡喜斜ならず

久遠の所化ぞと愛でたまふ

三、佛が昔宮を出で

伽耶城外の菩提樹下に

坐して成道あらせてより

僅に四十餘年なり

いかでか久遠なるべきや

四、我等は疑なき能はず

成道已來久しからぬに

所化の菩薩の夥しさよ

唯願くは如實に説き

衆疑を除かせたまへかし

五、二十五歳の少壯人が

百歲皺面の人を見て

これわが生みの子なりと云ひ

老人も亦若き人を

吾を育てし父と呼ばば

世の人信せぬ道理なり

六、この無数の大菩薩は

信念堅固に行を續み

無畏忍辱心決定し

端正の相威徳あり

空に住して智を念ひ

方便説法自在にて

難問答に巧なれば

十方諸佛も讃めたまふ

七、かゝるいみじき大衆を

何時の間にか教化せられし

畏けれども後の世に

もし佛説の一句だも

疑ふ人のありもせば

その罪地獄を免れじ

願くば佛愍みて

信解の道を開きませ

第二十八章 本佛常住、良醫の譬諭

信解せよ。一、本尊全部が誠諦の語である。先づ佛の智慧が法刀として入の上に偉大なる証明をなす事は信心疑念の体驗に依つて知るべきもの。理窟では分らぬ、これが信じられるれば佛語は別に六へかしい事はない。汝等信するやと念押さる。我等第一、空以來正式課程を経て、是まで訓練されて居る素人ではない。佛語は信ぜよと云ひ度い。

如來秘密神通之刀。一、これ本尊誠法の要目である。如來の境界如來の法刀に第二、空以來常に聞く所。如來の源流も如來を見又は如來の加護を被り得ること第十七章にも聞いたが、今改めて佛の誠諦の秘密神通之刀と稱して詳しくお説きに成るのである。先づ前章に未詳の彌勒の質疑、久遠問答から徹底せしめらる。

三

一 その時に、佛は諸の菩薩及一切の大衆に告げたまふ。「諸の善男子よ。汝等如來の誠諦の語を信解せよ。また告げたまふ。「汝等如來の誠諦の語を信解せよ。またまた告げたまふ。「汝等如來の誠諦の語を信解せよ。菩薩大衆、彌勒を首とし、合掌して白す。「我等皆つて佛語を信受し上るべし。唯願くば説かせたまへ。是の如く三たび白してまた曰く、「唯願くば説かせたまへ。我等必ず佛語を信受し上るべし。」

二 佛は諸の菩薩の是の如く三たび請うてなほ止まざる心を嘉納ありて、告げたまふ。「さらば諦に聽け、我今如來の秘密神通之刀を語らん。汝等以て最後の疑を解決すべし。而もこれ大法蓮華の心髓にして、佛道の淵源亦實に此に存す。

三 一切世間の迷へる者は皆、我釋迦牟尼佛は、僅に四十餘年前、釋氏の宮を出で、伽耶城を去ること遠からぬ、道場菩提樹下に坐して修行し、始めて成佛

したりとのみ調ひて、以前の事を知らぬがゆゑに、地涌の菩薩の因縁に就て、わが語に矛盾ありと疑ふなり。然るに善男子よ。我實に成佛せしは、無量無邊百千萬億不可思議劫の昔なり。假に人あつて、五百千萬億無量不可思議の三千大千世界を磨つて微塵とし、それを持ちて東方に他の世界を訪ね行くとせよ。一々の三千大千世界を経て、その數五百千萬億無量不可思議に達する毎に、一塵を下し、次第に進みて是の如くし、遂に所持の微塵を盡すに至らば、この人の經過せる所は、實に五百千萬億無量不可思議三千大千世界微塵數の五百千萬億無量不可思議三千大千世界なるべし。汝等如何に、この諸の世界の數を計算し、若くは想像し得るや。」

「世尊よ。この諸の世界は算數にも盡し難く、想像にも及び難し、聲聞緣覺の利智もその限を知らず、我等が不退智もまた及ぶ能はず。世尊よ。そは唯無量無邊と言ふの外なし。」

「善男子よ。その無量無邊の世界を集めて、盡く微塵となし、一塵を一劫として、總ての劫數を思へ。我成佛してより已來、それに過ぎたること更に百千

一塵一劫とし總ての劫一とせ五
百億劫と稱す
世々ありてたゞ此の數に
つめれる塵の程を久しき
(法眼源水)

三

久遠の佛一在様ですか久遠の佛なら久遠のお弟子あるも取て不思議にはあらず。是にて彌勒の質疑に証決す。

一念も恩徳を忘れず。是で第二十四章に依りて、此の情願ある人にして始めて勝進功勳第一の持経者たることを得るのだ。強い事を云ふのみでは當に成らぬ。恩徳とはつまり圓以下の通り、過去の上行等のみならず今の我身も扱ふべき御恩。

法師の模範一第二十四章止。善男子と仰せられた御真徳を明す。第五功勳の上行等は今の手本上行等を學んで將來に働くは我等の任務。是で蓮華三位の中菩薩の理徳の模範が極まった。

不辨一成るほど杖聲は佛の御先祖であらせられ御先祖がそのまゝ今日まで十方に活動せられた。第三章の燃燈佛は杖聲なりき。第十八章の多宝如来も十方衆衆の諸佛も皆衆尊の智慧自在神力にて現れたる今身佛にておはししなり。十八章「高遠に坐したまふも十九章偈十一項無量の國々と仰せあるも是なり。これはこれに彌勒質問に伴ふ大收穫。

萬億無量劫にして、我はこれ久遠の佛なり。爾來、我はこの娑婆世界を本土とし、常に法を説き、道を以て衆生を教化す。その最初に我に従つて教化されし者は、即ち今地より涌出せる無量の大菩薩衆なり。久遠劫一念も我が恩徳を忘れず、眞に法師の模範たり。

四 さて善男子よ。我はまた、他の百千萬億無量不可思議の世界に於ても、衆生を教化せり。この間に於て或は自ら燃燈佛等と成りて、諸所に出現し、また滅度を示せり。是の如きは皆衆生教化の方便なり。十方に諸佛あるは、實に我一人の分身應現にして、我はこれ本佛なり。

五 諸の善男子よ。我は佛眼を以て衆生の信等諸根の利鈍を觀、各道應せる道を以て、之を教化せんがため、或は時代と命數を異にし、或は名字と相形を變じて諸處に出現し、また時到りては滅度すと言ひ、また種々の方便を以て微妙の法を説き、よく衆生に歡喜の心を發させたり。善男子よ。我は實に久遠の昔、已に成佛すれども、衆生の小道に著し、徳薄く、垢重きを見て、この人のために、方便力を以て出世出家行道し、自ら成佛の範を示し、教化して、皆大道に

入ることを得さす。

信等諸根一第九章圓根力に註す。滅度すと言ひ一出現の因縁は已に知る滅度の因縁如何。過去の久遠は今承れり將來は如何。この問答が次の因にて明かとなる。

六 或は他の衆生と現じ一久遠本佛の教の法は佛に分付現するのみならず他の衆生にも現したまふ。これ久遠如来無量の如来事なり。八王千億五十六王子の教も今は愈々衰し、何時何處で誰か佛かも知れぬ。智慧神通發じて諸佛と成る。智慧神通發じて菩薩と成る衆生と成る。智慧神通は是の如く大如来事で有つた。

七 將來盡く心なし一佛の大智慧功德の力は亦無量壽を作る。無始以來の如来事は亦無量の後まで廢止したまはず。若し不滅一過去久遠の經將來も亦不滅は常住不滅である。是に於て我等は決定的に本佛常住と申上げる。圓で十方とあるが今は三世十方と知るなり。蓮華三位の佛は眞の理想の、永遠に在らば一是で滅度の理由を明かす。圓にて、滅度すと

六 善男子よ。三界の眞相は生死を絶す。在世のみが生ならず、滅度とて死ならず、現實を迷とせず。虚無を悟とせず、平等ならず、差別ならず、三界の者の三界を見るが如きものならず、斯の如きの事を我は明に見て錯謬あることなし。衆生を教化せんがため、或は佛に就て説き、或は他の衆生に就て説き、或は佛と現じ、或は他の衆生と現じ、或は佛の事を行じ、或は他の衆生の事を行すれども、錯謬なき佛知見に依るがゆゑに、わが所作言説は悉く眞實なり。諸の衆生に種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想分別あるに對し、その何をも教化して、皆善根を生ぜしめんがため、常に若干の因縁譬諭言辭を以て、種々に説法す。かくて大慈大悲の如来事は、久遠已來未だ曾て暫も廢止せず。

七 我は將來もまた永久に是の如く行すべし。如何となれば、我曾て菩薩と現じて、菩薩の事を行せし、その功德に依て成せる壽命、已に前の劫數に倍するものあり。況んや如来事一切の成す壽命、豈に將來盡くるの時あらんや。我は即ち常住不滅なり。然るに今實の滅度にあらねども、唱へて滅度すべしと言ふ

言ひ、ごありしがその種徳が分つた家である。

四 諸の僧も一以上菩薩大教に對して、歸られしが僧の方に、お振り向きになり、特に御注意あるなり。特別佛の御厄介にあつたれる僧等なり、故尊御滅度の後、死寂として居られる義理ではあるまい。世痛を鑑とせよ。

慈願湯仰
わかれに、その面影の戀しさに、夢にも見えず、山の端の月、（寂然法師）

善根一善修行

九 良藥一病苦を除くための藥であるれば、小遣渡銀の叙の如く思はるるも丘にあらず。第九章大白牛車一相一總淨妙第一の樂を生ずる一佛道、第十一章一相一味の法、蓮花の方使持師和合の靈藥なり、求至住の法師の慈恵を主成分とす。但し之を運學とは見るべからず。良醫と覺えたる子に、救療を受くる子との三位前ひて、良薬に良藥師はる家庭が、法を授

は、偏に衆生を教化せんがためなり。我もし永く世にあらば、薄徳の人は佛に馴れて、難遣の想と恭敬の心を失ひ、憍恣懈急を生じ、その心貧窮下賤にして、五欲に著し、妄見の網に入り、遂に善根功德なかるべし。この故に我は世に出でて法を説き已れば、時に方便を以て滅を示す。

八 諸の僧も思ふべし。諸佛の出世には値ひ難し。薄徳の人は百千萬億劫を過ぎて、たまたま佛を見る者あり、或はなほ且つ見る能はざる者あり。是等の佛を見上ることを得すと聞かば、つらつら自ら懈怠不信なりしことを悔い、慈智の光に浴しがたきを憾みて、難遣の想と戀慕の心を生じ、佛を渴仰して教を求め、やがて善根を種ふ、功德を積まん。この故に如來は、實には不滅におはせども、衆生を教化せんがため滅度すと云ふ。

九 善男子よ。諸佛如來の知見方便は皆是の如し。衆生を度せんがための慈悲なれば、悉く眞實なり。譬へば良醫あり、聰明にして巧に方藥し、よく諸病を治す。子息多く、その數凡そ百人なるが、愛護すること固く平等なり。或日用務あつて他國に往けり。子供等はその間に於て、恣に藥を取つて飲みき。この藥

良の靈藥なり。蓮華の中に法刀あるから蓮華は難有いと云へるが蓮華は法刀と同物とは言へず。平心一徳心樂樂

候を遣し、今なら御便でも電信でもよい、通知か届けば足る。學番が之を法法通の大導師に覺ふと現るは賛成せず。何と云れば大導師は佛滅せずと教す佛死すとは言はず。

孤獨
此のことはなむかやまき言と云く、鶴の林の空をこひつ、（寂然法師）

共に歡喜の生活一藥を飲み病癒ゆると雖も父の歸來することなくば、子供の悲感に癒えまじ。父と共に住してこそ眞實幸福なる生活なれ。子供として藥が大切か父が大切か二共に大切と言ひのが本當何れも蓮華の要素。

五 西世尊より、じうして狂機な事を思ひませうや。本姓始めから法力と云ふことは常に承つて居ま

毒藥なりしかば、害せられて皆悶へ苦み、伏し轉べり。この時父歸り來る。子供は父を見て大に喜び、喘ぎつ、跪き迎へて曰く、『よく安穩に歸りたまへり。我等患にして誤つて毒藥を飲めり。願くば救療せられて、我等が命を助けたまへ』と。父は子供の苦惱を診察し、諸の醫法により、適良なる藥劑を集め、搗き篩ひ和合して子供に與へ、『此は色香美味悉く具足せる良藥なり、汝等服用せば、速に苦惱を除き、再び諸の患なかるべし』と告ぐ。子供の中未だ本心を失はざる者は、この好き藥を見て、直に服し、病盡く除き癒えたり。然るに毒氣深、入りて、本心を失へる者は、此の好き藥を美からずと思ひ、肯て服せず。父は思ふやう、『慰れこの子は毒のために心狂へり。救療を求むと雖も、父の藥を信せず。今は方便を以てこの藥を飲ますべし』と。即ち告げて曰く、『我は老衰し、死の時近し、この良藥を今留めて此に在く、汝等取つて服せば、病必ず癒ゆべし、敢て憂ふることなかれ』と。この語を遺して、また他國に往き、やがて使を遣して、『汝等が父死せり』と告げさす。子供は聞いて大に驚き、『父もし狂さば我等を慰みて、よく救護せられましを、今は我等を捨てて、遠く衰

した今その作所を断く明瞭に具
体的に説明頂き安に仕りました
常住不滅―本尊にて非常に善か
つた事は本佛と常住の二説であ
る。従つて普現應身非滅現滅の
方便が非常に結構であつた。
我等が久しく求めて居る「我
等の佛」が極まり難有かつた。
蓮華三位の佛は如來一人にて在
しき。本佛光顯さる。是事上行
菩薩のみが已に早く知つて居ら
れた。

一、偈

神通力―法力智力方便力皆是と
同じ初なり。總論でよく神通力
と言ふのみ
實には滅度せず―
しはしこそ影をまかくせ驚の山
高嶺の向は今も道むる
(増大佛部隆淵)

りたまふ。惟へば孤露にして、また恃む所なし」と、悲あまりて心遂に醒悟し、
始めて父が遺し置ける藥の美さを知り、取つて之を服し、病全く癒ゆ。その時、
父は子供の病癒えたるを聞き、直に歸り來りて相見え、共に歡喜の生活に入れ
り。

○ 諸の善男子よ。如何に、この良醫に虚妄の罪ありや否や。

否、世尊よ。そは眞實なり。

「我も亦是の如し。成佛已來無量無邊百千萬億不可思議劫にして、常住不滅な
れども、衆生を濟度せんがため、方便力を以て滅を示すに、何ぞ我に虚妄の過
ありと云ふの理あらんや。」

一、我釋迦牟尼は始なき

絶えず衆生を教化して

その數已に無數億

滅度を示すことありき

迷へる人には見えねども

昔ながらの佛なり

佛の道に入らしめし

神通力もて數多たび

されど實には滅度せず

常に此處にて法を説く

二、衆生は佛の滅度に會ふ

深き恩恵は如何にして

今一度の値遇だに

慈悲渴仰いよまさる

我は衆僧を伴ひて

我は不滅の身ながらに

衆生を導く方便なり

覺を樂ふ人のため

説き示さんと昔より

汝等聞かず徒に

衆生を見れば苦の

されば慈悲の方便に

佛を懇慕渴仰し

呼ぶ聲聞けは時去らず

舍利を供養し祭れども

何時かは報いまいらせん

叶はゞ身命惜しからじと

心の誠見えし時

もとの姿を現しぬ

滅度を示すことあるは

信心に我を敬ひて

何國にも往き無上法

世に出づる度に語りしを

滅度を最後と思ひたり

海に没みて慰なり

しばしわが身を隠せども

救の綱を投げたまへと

往いて實の身を出現し

二、

深き恩恵―既別して始めて今ま
での恩を知る凡夫の習心

三、

信心に覺を樂ふ―佛は願樂佛の
佛は信に願樂ある前にきく。

何國にも往き―第十四章曰に
も説く。不語は導師を親失ひ、
善の山くもる地のなかりせば
これも察すべき有明の月
(西行法師)

四、

五の清度―長行にては良藥救療
に當る

五、

さればこの土は、佛の在す所處
當山には限らず一切餘の處もこ
の土なり。何處でも佛と共なる
ことを得。信心次第で此處即佛
の淨土なり
佛と弟子に、衆生が佛と菩薩に
一對二する。
劫盡き、第十九卷偈八に註す、
善根功徳、信と行
したに、少しももの竟、心さへ
あれば行は不要と云ふに非ず。
源の道に叶はぬけいけい。

七、

佛菩薩等と相れ、本佛は常住と
知るべし。佛菩薩所居の壽命即
本佛を思ふ一念は永至住成に成
り行、盡さず壽命の命を証ら
ん
佛を照し神に奉む、
これりまきの水に影とめて
いたゞみやどれ山の端の月
佛の處、衆生の信心から境邊
か出来佛の安樂世界と一體に成
る淨土に住す。
身を證らん、佛も衆生の衆報と
して不滅の身を證られた。その
處に信すれば疑でも証れる。此
所は善報致すてあふべき思であ

八、

本佛を疑ふ、以上七項までの
善の義理が分らぬ人は分らぬで
もよい。然し佛の善業は衆生諸
尊の本願から出て居る。この本願
と云ふ佛の心だけを疑つてはい
けない。此所をやつて行く人が
徳善の鏡を大導師は本佛の善者
だ。因の裏に法師の模範である。

一〇、

照し覺て、佛菩薩したまふ、嘆
むべし
念々慮るる障はあらず、本佛常
に光輝され出でて天照すに地
する。まゝ本佛の常に照す大力
用感應化を説いて餘す所もな
し、實に善報の心懸である佛産の
神澤である。而も總して念々

三三八

五、

法力をもてこの人を
我は一切處に在りて
さればこの土は安穩に
園林寶樹華果多く
佛と弟子に供養する
げに譬類なき法樂の
衆生は深き惡業の

六、

憂怖苦惱をば逃れんと
永き代までも救の主の
善根功徳心だに
何處も同じ寂光土
我世に亡きを嘆みては
たまたま我を見ん人は
佛は智慧の光もて

七、

不思議の力神に染み
萬行の徳を累ねつつ
衆生濟度の本願を
信者の鏡となりてこそ
狂へる我が子を救はんため
醫師の語に虚妄なし
衆生の苦患を救はんため
我もし永く世に在らば
遭ひ難かりし事を忘れ
受けず信せず敬はず
五欲の樂に貪著し
深く邪道に迷ひ入り
衆生の眼にこそ我見えね
業の善惡縁の利鈍

八、

皆安穩の處を得て
盡さぬ壽命の身を證らん
疑ふなかれ雲なき
眞の智者とは謂ふべけれ
實はあれども亡しと告げし
我もまた世の父なれば
滅度は親の慈悲なり
何時しか馴るる人心
この好き敬ありながら
戒行なれば怒に
煩惱の暗あやなくして
果は無間の底ならん
我は實に此に在り
度すべきやうを照し覺て

一〇、

業の善惡縁の利鈍

忘るる難なしし大慈大悲の願處
を傾け盡したまふこの大恩は地
涌の菩薩の外知る者なかりし。
本章の十箇十項講義では意盡さ
れぬ前に拜讀して妙處に觸れよ。
本佛光輝して蓮華の跏趺に法力
を盡す。法力の未至は今本佛
の未至住これ正法の曉醒なり。

第二十九章

種々に救へて皆人を
勝妙の功徳を累ねさせ
證らせなんと念々に

無上の道に誘ひ入れ
速く如來の境界を
忘るる際はあらずかし

二四〇

第二十九章 大會得益し、彌勒疑を解く

一 大會の無量無邊不可思議の衆は、釋迦牟尼佛が過去久遠劫よりの佛にておはし、且つ一切諸佛の本体にましまし、將來も亦常住不滅、常に衆生を救護教導なしたまふべきことを聞き、皆大饒益を覺えつ。

二 その時に、世尊は彌勒菩薩に告げたまふ、「彌勒よ。我昔本佛常住を説きたし時、六百八十萬億無量恒河沙の衆生は、不生不滅の信念を得たり。また千倍の菩薩は多聞總持して諸の陀羅尼を具し、百千萬億無量の義に通達し、樂説無礙辯才を以て不退清淨に説法せり。また小千世界微塵數の菩薩は、八生後の無上覺に適ひ、四四天下微塵數の菩薩は、四生後の無上覺に適ひ、三四天下微塵數

三 本佛常住を聞いて利益を得た人益から多い今佛も衆心べしと云ふ意。即三十四章四に「能く如來新上覺の心を起さん」とあるのも是事なり。

四 世尊並に十方來の諸佛十本佛が説いた以上は彌勒佛として衆生の全體は法華の會衆である。即ち我佛は諸佛を偈くと應は成すオキヤンと考へて讀取すべし。

の菩薩は、三生後の無上覺に適ひ、二四天下微塵數の菩薩は、二生後の無上覺に適ひ、一四天下微塵數の菩薩は、一生後の無上覺に適ひ、八世界微塵數の菩薩は、皆無上道の心を發せり。

三 佛が是の如く諸の菩薩の大法利を得たるを説きたまひしとき、諸天は虚空の中より、種々の妙華を雨して、二世尊並に十方來の諸佛の上に散じ、また一切の菩薩及四部の衆に散せり。栴檀沈木の香風四方に薫じ、天鼓自づから鳴りて、妙音深遠なり。また千種の天衣を雨し、諸の眞珠瓔珞、無垢珠瓔珞、如意珠瓔珞を徧く八方及中央に垂れ、衆寶の香爐に無價の香を燒き、周く大會に供養せり。諸の菩薩は一々の佛の上に幡蓋を懸し、次第に高く梵天に付け、皆妙音聲を以て無量の頌を歌ひ、諸佛を讚歎し上れり。

四 彌勒菩薩は疑念全く除れ、座より起つて、恭しく右肩を袒ぎ、合掌して佛に向ひ、偈を以て頌辭を述べ

一、希有の御故うれしさよ
又遠本佛にましますば

世尊は秘密神通之力
地涌の菩薩はその昔の

佛の所化と知られたり
 種々の法益ありとかや
 二、六百八十萬億恒沙の衆生
 また千倍の大菩薩
 無量の義趣に通達し
 或は不退に説法し
 小千世界微塵の菩薩は
 四三二一、四天下の
 四三二一生に成道し
 忽ち無上の心を發す
 聞きし衆生はかくばかり
 不可思議の事を明されし
 虚空の如く邊際もなし
 三、諸天も歡喜したりけん

受け聞く衆生忽に
 我等も歡喜身に溢る
 不生不滅の信念を得
 多聞總持し陀羅尼を具へ
 樂説無礙の辯才あり
 或は清淨に説法す
 八生にして成道し
 各々微塵数の菩薩
 また八世界微塵の衆
 佛の壽命長遠を
 無漏清淨の功德あり
 利益は甚だ大にして
 無數佛土の釋梵王

四、偈
 御光は永久にいや榮えし正法世
 世が長に流れて道盛なり
 五に稱讃し衆生が相互に尊敬し
 相互に扶助し共存共栄するは道
 であるが聖は皆が本佛常住の御
 光に仰いでこそまよく行くこと
 ぶ恩恵。忠に統一されての同體

四、
 恒沙の如くに集ひ來て
 栴檀沉水香の雨
 紛々として亂れ落ち
 天鼓虚空に妙に鳴り
 珍寶殊好の香爐に
 自然に固く薰じわたる
 かざす七寶の幢蓋は
 十方より集りませる
 寶幢跨靡を飾りたて
 歌詠讚美し上る

諸佛世尊に供養する
 天の曼陀羅、摩訶曼陀羅華
 群鳥空を翔るが如し
 天衣千億旋り降り
 千萬無價の香を焼き
 また諸の大菩薩が
 高く天にも届きぬべし
 諸佛如來の御前にも
 百千萬の偈を以て

本佛常住不滅と聞く
 大慈大悲の御光は
 御名は十方世界に聞え
 五に善根功德を積み

我等が歡喜限なし
 永代にいや榮えまし
 廣く衆生を惠みたまへば
 無上の道に精進まん

法華に説一されての兄弟友、第十七章因及因縁一には之を知らずしては稱讃も出来ぬとある。

第三十章

第三十章 一念信解の功德を説き、持經の功德に及ぶ

常住威光を放つ。佛と餘の二位が心を一にし、世々一佛道の美を活すは法華の大徳也であるが、今本佛は常住威光を放ちたまふ。種つたからには若し光が暗きれば、本佛常住現れて持經者の責任愈々重く成る。そのためにこそ本佛常住は説かれるのだとも云つてよい。譬より頻りに持經の功徳を説き光を照らすからしむ。正法一編八章四にて正法とは法華を説くことと註したが此所に來て本佛常住の事が明瞭に成れば法華即本佛の威光と稱し得べく、從つて正法は本佛の絕對尊嚴を仰ぐ所の大其名分と云ふに等しい事に成るのである。一念の信解一處で蓮華三位の中衆生位の覺悟に及ぶするのである。それから進んで持經稱讚、兼壽高供養の尊貴位に成るのである。

一 佛は彌勒菩薩に告げたまふ。彌勒よ。佛は常住威光を放ちたまふがゆゑに、正法も亦常住ならざるべからず。若し正法の衰ふることあるとせば、それは專ら本佛常住を信受せずして、佛の威光を蔽ふ者の罪なり。彌勒よ。若しそれ衆生あつて、本佛常住を聞き、乃至一念の信解を生ぜば、その功德は限量なかるべし。譬へば善男善女あつて、無上道のため、八十萬億劫の間、よく五種の達道を修せん、一には布施行、二には持戒行、三には忍辱行、四には精進行、五には禪定行なり。智慧行は暫く措く。五種達道の功德は甚大なり、然れども、一念信解の功德に比するときは、百千萬億分の一にも及ぶまじ。されば一念信解の功德あらん人は、無上道に於て退轉するの理なかるべし。

一、たとへば八十萬億劫 殊好の飲食衣服臥具 佛と菩薩緣覺に 梅檀栴舍園林を

信解

佛の智慧を信入するは、一、信解行、五種達道の道に成つて是から智慧行と稱すべし。あるは、佛は常住の威光を放ちたまふがゆゑに、佛の威光を蔽ふ者の罪なり。彌勒よ。若しそれ衆生あつて、本佛常住を聞き、乃至一念の信解を生ぜば、その功德は限量なかるべし。譬へば善男善女あつて、無上道のため、八十萬億劫の間、よく五種の達道

布施供養して怠らず
また清淨の戒を持ち
忍辱調柔の地に住し
増上慢の輕悔に
一心堅固に精進し
睡を拂ひ心を攝め
五種達道の福ある人が
更に百千萬億劫
わが常住を聞く人の
無量億劫行すとも
もし諸の菩薩たら
わが常住を信解せば
常に經典を頂受して
世尊が諸釋の王として

常に佛の道に回向し
諸佛第一の道を求め
諸惡來るも心動せず
悩ざるもよく忍び
閑處に坐行經行し
諸の禪定力を得て
佛の智慧を得んために
行ぜん功德は多けれど
一念信解の功に如くまじ
佛を知らねば効ぞなき
疑を去り須臾の間も
心は直に決定し
衆生濟度の願を發し
道場に師子吼說法し

常住を説くべしと

行承もなからし橋の朽ちずして
つくる世しなく人を渡さん
（説人しらす）
皆人を渡さんと誓ふともつゝの
まかくもかなわぬの川舟

（正三位隆教）
朽て議論であるが我等佛にして
常住を自明するは善いが若し世
の世界に教主と成つて時自ら本
佛と説くは遠慮なきや。遠慮す
べし事や釈尊の所化なればなり
現在十方の諸佛は各自本佛と自
稱し得るや。自稱し得ず。現在
此に列席して釈尊が本佛なるこ
とに御異議もない。また諸佛は
釈尊の分身なり。釈尊は諸佛の御
先祖なり。何れの佛が釈尊より先
誕ならんや。は釈尊の弟子若
は係属なるべし。十方諸佛が勝手
に本佛と稱するは偏執なり。少く
とも今度釈尊の立場を皆が黙証
した以上は將來は相成らぬ。之
を將來に決せんためにこそ中興
國際の大儀式の遙空演説を催さ
れたのである。

本體を正觀一志力來至住する姿
を第六節以來想像して來たが今
は之を本佛釈尊の法界の國體と
して正確に觀る。この事が人の

信念とされればそれから産れる哲
學は眞實無疑である。この信念
で社會の幸福を研究すれば必ず
安んずる。是の如き信念がある
人が大學で何を言ふ自由な法政
經濟の研究せば必ず説議や行
動がさかなく立派な成績を擧
げるであらうと思ふ。
八重の樹一タラシ樹は棕櫚の類
高八九十尺もあり、八重の樹は
その約八倍高さのこと。

畏るる所なきに同じく
自身も將來作佛して
衆に敬はれ道場に坐し
また常住を説くべしと
一心清淨に希はん
されば佛を知る人は
多聞にしてよく持ち
義に隨つて佛語を解し
常に勇猛精進して
必ず所願を成就せん

二 彌勒よ。本佛常住を聞いて、その言趣に一念の信解を生ずる功德は是の如く、能く如來無上慧の心を起さん。況んや蓮華經一般を聞き、よく人にも聞かせ、自ら持たて、人にも持たせ、自ら讀誦して、人にも解説し、自ら書寫して、人にも書寫させ、若くは華香瓔珞幢蓋香油蘇燈を以て經卷を供養せん者をや。この人の功德は無量無邊にして、能く佛智を生ぜん。

三 彌勒よ。若し善男善女にして、本佛常住を聞いて、深心に信解せん者は、これ佛が靈鷲山にあつて、大菩薩衆に圍繞され、說法あらせらるるを常に見、また娑婆世界の、地は瑠璃平正にして、閻浮檀金を以て八道を界し、寶樹莊嚴し、諸觀樓臺は衆寶合飾し、國中に菩薩充滿して、佛事を奉行するを見るなり。

よく是の如く觀する、是を深信解の相となす。然り而して、如來の滅後、蓮華經を聞いて、苟も毀謗せず、佛が常住不滅にましまし、よく一身を以て、三世十方に應現し、一切衆生を我が子として救護教導したまふことを知り、寧ろ隨喜の心を起さん者は、亦上の如く常に蓮華の本體を正觀する者にして、これ亦已に深信解の相なり。もし深信解の相を以てこの經を受持し、讀誦し、解説、書寫し、供養せん人は、これ如來を頂戴する者なり。この人あるに依て、如來の正法は如來の壽命と共に、長遠に世に住すべし。

四 彌勒よ。かかる善男善女は、塔を起てて佛を供養するを要せず。又は僧坊を作り、衣服、飲食、臥具、湯藥を以て、衆僧を供養するをも要せず。如何とされば、蓮華經を供養する者は、これ已に塔を起て、或は僧坊を作り、種々妙好を以て佛及衆僧を供養する者なり。精しく言はば、佛の舍利を奉じて七寶の塔、高く梵天に達するを起て、諸の幡蓋、寶鈴、華香、瓔珞、栴檀、塗香、燒香、衆鼓、伎樂、箏、笛、琴、空篳、種々の舞戲、反妙音聲の歌、頌、讚、頌を以て、無量百千萬億劫、佛を供養するにも勝り。又は赤梅檀の諸の殿堂三十有二、高八多羅樹、高廣嚴好し、皆百千の

僧を容るるに足り、園林浴池、經行處、種窟完備し、衣服飲食、林傳湯藥、一切の樂具を充滿せる是の如き僧坊堂閣若干百千萬億無量を作り、佛の現前に於て、恭敬を供養するにも勝れり。この故に我は言ふ。如來の滅後、に於て、よく深信解して蓮華經を受持し讚誦し、他人のために説き、自ら書き、人にも書かせ、經卷を供養せん者は、塔を起て、佛を供養し、若くは僧坊を作りて、衆僧を供養するを要せず」と。

〔五〕 沉んや兼ねて布施、持戒、忍辱、精進、禪定、及智慧を行ぜんをや。その功德は無量無邊にして、虚空の東西南北、四維上下、邊際なきが如くならん。この人は疾く佛智に至ることを得べし。

〔六〕 何に沉んや。もし人深信解の相に立脚して、この經を受持し、解説、書寫し、供養し、また、塔を起て、僧坊を作り、聲聞衆僧を供養讚歎し、百千萬億の偈を以て、菩薩の功德を讚歎し、他人のために、種々の因縁を以て義に隨つて法を説き、よく清淨の戒を持ち、柔和の者と事を共にし、忍辱にして瞋なく、精進勇猛にして諸の善を撰め、志念堅固に坐禪を貴び、諸の禪定を得、利根智慧

〔六〕 何に沉んや。此所は受持、読誦、解説、書寫、供養に加ふるに、塔寺、僧坊の所施供養に於て、菩薩の功德を讚歎し、他人のために、種々の因縁を以て義に隨つて法を説き、よく清淨の戒を持ち、柔和の者と事を共にし、忍辱にして瞋なく、精進勇猛にして諸の善を撰め、志念堅固に坐禪を貴び、諸の禪定を得、利根智慧

あつて、善く問難に答へんをや。是の如きの諸の善功德を兼ね備へん者は、已に蓮華に懸いて寶樹下に坐し、無上變に近ける者なり。この善男善女が坐し、若くは立ち、若くは經行せん所には、忝しく塔を起てよ。一切寶殿の人、皆この塔を敬ふこと、佛を敬ふか如くならん。

- 一、 わが滅度の後の世に
 - 一切供養の徳を具せん
 - 七寶をもて莊嚴し
 - 千萬億の金の鈴
 - 華香瓔珞天衣を供へ
 - 無數の香油酥燈を燃し
 - 堅劫佛を供養する
- 二、 末代恐怖の惡世に
 - 一切供養の徳を具せん
 - 高八多羅樹の室蘭を
 - 蓮華經を待たん人は
 - 舍利を奉じて塔を起て
 - 表刹高く天を摩し
 - 風に動じて妙に鳴らせ
 - 種々の伎樂を奏でさせ
 - 常に固く照明して
 - 徳に勝れる徳あらん
 - 蓮華經を待たん人は
 - 牛頭栴檀の木を以て
 - 三十二ヶ所に起て並べ

百千の僧の住所とし

園林涼しく浴池淨く

種々宏莊に嚴飾し

寂僧を供養するよりも

三、深き信解の心もて

自ら書きては人にも書かせ

須曼、臈蔔、阿提目多伽

この經卷を供養せん

虚空の如く邊際なけん

四、沉んや兼ねて布施持戒し

道説く僧に謙下して

ひたすら佛慧を思ひつゝ

逆はず快く解説して

功德は更に多からん

美膳妙衣臥具多く

經行處及禪窟を

現在佛の御前にて

なほ勝りたる徳あらん

蓮華經を受持し讀誦し

羣香抹香をふり灑ぎ

種々の薰油を燃させて

人の功德は無量にて

佛の塔廟を供養恭敬し

自高我慢の心なく

問難累しきときも

如説修行せん人の

五、かかる功德の法師には

頭面に足を禮拜し

この人やがて道場に坐し

廣く世間を利益せん

一偈をも説きし處には

心もこのて供養せよ

佛もそれを受用して

天華天衣を供養して

佛を敬ふ如くせよ

無上の覺を成就して

その住居し經行坐卧し

塔を起てて莊嚴し

佛弟子此に住しなば

共に經行坐卧しむまはん

第三十一章

共に經行坐卧し佛が附添うて下さる。目に如來を瞻敬する者とある同じ事ながら此所の方が觀及深い。或その徳を一にせんことを尊貴ふと拜稱する。

第三十一章 一念隨喜の功德を説き、持經の功德に及ぶ

一、彌勒菩薩問ひ上る。「世尊よ。善男善女にして、如來の滅後、蓮華經を聞いて隨喜せん者は、幾所の功德あるべきや。」

二、佛告けたまふ。「彌勒よ。僧俗男女老若の智者が、如來の滅後、蓮華經を聞

信解の相ならずとも隨喜一信解は分ることであるが隨喜は意味は分らずとも唯難有いと説すること、第三十章(三)に隨喜とあることを再び説上げて問題にしたのである。勿論第十七章に已に正式に隨喜を信解の順序第一に置いた。然し今本師常住が明かされた從來法力中心よりし運筆が今度法力の本持たる釈尊中心に成つて來たので再びお説きになるのである。

き、未だ信解の相ならずとも、たゞ一念隨喜して法會を出で、僧坊閑地、城邑巷陌、聚落、若くは村里に至り、聞き得たる一偈を、父母親戚、善友、知人のために、隨喜力語り傳へ、傳へ聞き得たる人もまた隨喜して、往いて他人に語り傳へん。是の如く展轉して傳ふること、第五十人とならば、その隨喜の心も漸く稀薄となるべし。さてこの第五十番隨喜者の功德如何と言はゞ、譬へば人あり、四百萬億不可思議世界の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、或は卵生、胎生、濕生、化生、若くは有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無足、二足、四足、多足等、有らゆる衆生に多くの樂具を施與し、その欲を満足させ、而も各々に與へしものは、一天下の大を以て、辛くも容るるばかりの金銀、珊瑚、磲磔、碼碯、珊瑚、琥珀、諸の珍寶、象馬、車乘、及七寶、合師の宮殿、樓閣等なり。今この大施主是の如く布施を行ふこと、八十年に滿ち、時に思ふやう、我は從來種々娛樂の具を衆生に施して、その欲を満足させたれども、この諸の衆生は已に老衰し、髮白く面皺む、久しからずして死することあらん。今は佛法を以て之を救はんのみ」と。即時にこの衆生を集めて、宣布法化し、示教利喜と、皆同時に六趣の境を起えて、阿羅漢道を了達し、諸の漏を滅し、深禪定に入りて、自在を得、八解脫を具するまでにせり。汝等如何、その功德は少しと思ふや。

「世尊よ。この人の功德は無量無邊なり。衆生に一切の樂具を施せる功德已に多大なり。況んや教化して、阿羅漢果を得させたるをや」。

三 「分明に聽け。蓮華經の一偈を展轉傳へ聞いて隨喜せる第五十人の功德は、この大施の功德に百千萬億倍し、算數又は譬論も測り知る能はざらん。彌勒よ。蓮華經を展轉傳へ聞いて隨喜せる第五十人の功德すら無量無邊なり。況んや最初會中に於て、聞いて隨喜せる人をや。その功德の勝れたること、更に無量無邊不可思議ならん」。

四 彌勒よ。もし人故に蓮華經を聽かんがため僧坊に詣り、坐し若くは立ちて、須臾も聽受せば、來世に上妙の家馬、車乘、珍寶、華鬘を得、また天の宮殿に乗ずることを得べし。

もし人說法會に於て坐してあらんとき、たまたま後に來れる人に座を與へ、若くは座を譲り、勸めてこの經を聽かせなば、その功德は更に多くして、來世

第五十隨喜の人
谷川の流の末を汲む人も
まづといひかはしむしありける
(後成)

初隨喜の人
水上をおもひこそやれ谷川の
なげれも何ふ病の下露
(法眼深水)

ゆくもみも昔にこそ句へ白病の
露もおち添ふ谷の下水
(涙を眞足)

帝釈の坐處、梵天の坐處、空羅門、教で冥福を祈るのに、冥の如く天に生かざるを理想として居た。佛敎の主張ではないが善い加減の處には便宜を認めて、或る程度の功德を表すに用ひらる。菩薩と一處に生ると言へば天に生ずるよりも上なり。

況んや、此所も前章と同様、持
隨喜して他に説き傳へん
聞いて一念隨喜せん
二、譬へば大施主八十年
許多の樂具を給與して
衆生はやがて老衰し
齒疎き形容枯れはてて
三、この上はたゞ佛法をもて
涅槃樂の道を説き
厭離の心を起せよと
諸人は聞いて阿羅漢を得
皆悉く具足せり
四、かゝる大施をなす人の
五十展轉この經の

に帝釋天の坐處、或は梵天王の坐處、或は轉輪聖王の坐處に往くことを得べし。
また彌勒よ。もし人、蓮華經は、大聖釋迦牟尼世尊の説き置かせたまひし眞
寶の教なり、共に往いて聽かん」と、他人の勤むるを受け、伴ひ往いて須臾も
聽かば、來世に陀羅尼の菩薩と一處に生れ、利根智慧あるべし。百千萬生々に
直りて、遂に瘡癰とならず。口氣臭からず、舌の病なく、口の病なく。齒は垢
れず、黒まず、黃まず、疎かず、缺かず、差はず、曲らず。唇は垂れず、唇は
衰れず、唇は腫れず、鼻は匾からず、鼻は曲らず、鼻は黒ならず、鼻は狭
からず、鼻は曲らず。一切の不快の相なく。眉は高く長く、額は廣く平に、面貌円満
にして、人相具足せん。この福報を以て世に行ずれば、衆生を利益するの便利多か
らん。また世々生れん所にては、佛に遭ひ上り、教を聞いてよく信受するを得べし。
五、彌勒よ。汝暫く思へ。上の如く種々縁を以て、須臾も蓮華經を聽ける功德
すら是の如し、況んや自ら一心に聽いて、讀誦書寫し、大衆のために分別して
説き、説の如く修行せんをや。この人は必ず無上道を成就することを得べし。
一、蓮華の經を聞きたる人
心隨喜し法會を出でて

一偈を人に説き傳へん
隨喜して他に説き傳へん
聞いて一念隨喜せん
二、譬へば大施主八十年
許多の樂具を給與して
衆生はやがて老衰し
齒疎き形容枯れはてて
三、この上はたゞ佛法をもて
涅槃樂の道を説き
厭離の心を起せよと
諸人は聞いて阿羅漢を得
皆悉く具足せり
四、かゝる大施をなす人の
五十展轉この經の

つたから已むを得ずとするも、今日徳業が出来なければ、因縁を切て前二章は持經の功徳が大なるを言ふが抽象的であつた。本章にて一々具體的に言ふなり、特に意根清浄が讀み所なり。

三傳

彌樓山一須彌山を固る金山七つありし云ふ當時の傳説。

淨なるがゆゑに、菩薩の願ふ救世の行は、その力を倍増すべし。
二 眼の功徳を言はゞ。肉眼清浄にして、三千大千世界の有らゆる山林河海を、下は阿鼻地獄より、上は有頂まで悉く見、またその中の一切衆生の業の因縁、果報の生處を悉く見ることを得べし。

- 蓮華の經を受け持ち 如説修行する人は
- 父母に受けたる肉眼にて 阿鼻地獄より有頂まで
- 三千世界の内外の 彌樓山須彌山鐵圍山
- 山林河海の衆生を 悉く見て誤らず
- 未だ天眼ならねども この清浄の功徳あり

三 耳根清浄の功徳を言はゞ。阿鼻地獄より有頂天に至るまで、三千大千世界の内外の有らゆる語言音聲象聲馬聲牛聲車聲啼哭の聲愁歎の聲螺聲鼓聲鐘聲鈴聲笑聲語る聲男聲女聲童子聲童女聲法聲非法聲苦聲樂聲凡夫聲聖人聲喜聲怒聲天聲龍聲夜叉聲乾闥婆聲阿修羅聲迦樓羅聲緊那羅聲摩睺羅伽聲火聲水聲風聲地獄聲畜生聲餓鬼聲僧聲尼僧聲聲聞聲緣覺聲菩薩聲佛聲等、一切の聲を、未だ

天耳を得ずと雖も、父母に受けたる耳、自づから清浄にして、悉皆聞き知るべし。是の如く種々の音聲を分別すれども、耳根を傷ふことなけん。

- 一、生れながらの尋常の耳 清浄にして濁穢なく
- 三千世界の聲を聞かん 象馬の聲、車牛の聲
- 鐘鈴の聲、螺鼓の聲 簫、笛、琴、瑟、空篋の聲
- 好歌を聞いて執着なく 無數の人の種々の聲を
- 一時に聞いてよく了らん

- 二、諸天の妙に歌ふ聲 男女、童男童女の聲
- 山川嶮谷を鳴き渡る 迦陵頻伽の鳥の聲
- 地獄の苦痛楚毒の聲 餓鬼の飲食をあせる聲
- 修羅の海邊に叫ぶ聲 十方世界の禽獸の聲
- 諸天の語る言葉まで 蓮華經を持つ人は
- 遙に聞いて皆知らん 經典讀誦する聲も
- 三、また一切の僧尼僧の

三傳
一、
惡一大琴、二十九瑟あり、二十五絃あり、
琴一、曲り琴、二十三絃あり、
瑟と云ふ工人の音楽。

諸佛世尊一本佛願して諸佛は消滅するはと云ふに在にあらす。本佛も尊貴なれど諸佛あるも亦事實にして且つ必要なり。

菩薩の經典を身讀して
神通力もて法を演べ
諸佛世尊の音聲も
耳根疲れず衰へず
この清淨の功德あり

人にその義を説く聲も
一切衆生を度したまふ
持經の法師は皆聞きて
いまだ天耳を得ざれども

四、鼻根清淨の功德を言はゞ。三千大千世界の上下内外の種々の香、須曼那華香、蘭提華香、末利華香、瞻蔔華香、波羅華香、赤蓮華香、青蓮華香、白蓮華香、華樹香、果樹香、梅檀香、沉水香、多摩羅跋香、多伽羅香、及千萬種の和合香、栴檀香、丸香、塗香を、この世間に於て悉くよく聞き知り。また衆生の香、象馬の香、牛羊の香、男女香、童子香、童女香、及草木叢林の香、有らゆる遠近の香を聞きて誤なし。また天上の波利質多羅、拘鞞陀羅樹香、曼陀羅華香、曼珠沙華香、栴檀沉水、種種々抹香、諸の雜華香等、和合して出す香を、聞き知らぬことなく。諸天の身の香、釋提桓因王が勝殿の上にあつて、五欲に娛樂嬉戯する時の香、妙法堂に昇つて諸天に說法する時の香、若くは園林に於て遊戯する時の香、梵天乃至有頂の天人天女の身の香、諸

波利質多羅、拘鞞陀羅樹一須曼那華香、蘭提華香あり、蓮花は疑はせり。切利天に於ける樹王と云ふは、第三卷回向一四に天の樹王とあるなり。

天が焼く香を悉く聞き、また聲聞の香、緣覺の香、菩薩の香、諸佛の香を、遙に聞いてその在所を知る。この種々の香を皆聞けども、而も鼻根を壞らす、よく他人のために、誤なく分別して微妙の香氣を説明することを得べし。

- 一、持經者鼻根清淨にして
此界他界の好臭の
香を悉く聞き知らん
- 二、須曼那蘭提多摩羅栴檀
男女の香を聞き
輪王王子臣妾が
種々の妙なる寶の香を
諸天の行坐遊戯神變も
樹々に咲く花實る果
悉くその所在を知り
華吹く中の衆生や
住む群生の香を聞きて
- 三、
遙に所在をよく知らん
身に着け穢に納めたる
聞いてそれ等の主を知り
香を聞いて皆よく知らん
或は蘇油の香を聞きて
深山に茂る栴檀の
鐵圍山、地中、大海に
悉くその所在を知り

阿修羅の男女眷屬の

香を聞いて悉く知り

獅子象虎狼野牛水牛をも

四、香を聞くの力にて

初産の安きと難きを知り

修善の心の有無を知り

銅器に盛りて隠されたる

或は種々の瓔珞の

五、天の曼陀羅、曼殊沙埵

かの宮殿の莊嚴を知り

五欲の樂を察める

放を聞いて歡喜せる

羽衣を風に飄し

香を聞いて見る如く知り

闘争遊戲の様までも

曠野を馳り險に臥す

香にて在所を皆知らん

胎兒の男女無根非人

人の念染欲癡恚

或は地中の伏藏に

金銀珍寶を悉く知り

價値と所在を皆知らん

波利質多樹の香を聞きて

天子が園林勝殿にて

或は妙法堂に入り

來往行坐を香にて知り

天女が虚空に舞ひ遊ぶをも

梵天乃至有頂にて

初生退没する者をも

入禪出禪する者をも

香を聞いて悉く知らん

六、衆僧が佛道に精進し

林樹の下に修行せるをも

菩薩が志念堅固にして

人に解説し教ふるをも

諸佛が一切に敬はれ

説法教化したまへば

香にて悉くよく知らん

七、無漏法生の鼻をらぬ

かゝる不思議の力あるは

受持修行する功德なり

初生退没する者をも

靜坐し黙歩し讀經し

香を聞いてよく在所を知り

坐禪し又は讀經し

香を聞いて皆よく知り

衆生を愍み方便して

皆歡喜して修行せるをも

父母に受けたる鼻にして

ひとへに妙法蓮華經を

五

「舌の清淨を言はず。醜惡苦澁の物も、舌根に觸るれば、皆變じて美味と成り、上妙甘露の如くならん。またこの舌根を以て大衆のために説法すれば、

四
寶女の千子、釋輪王に七寶あり、輪寶、寶寶、馬寶、珠寶、女寶、藏寶、及び共寶にして、女寶は千の王子を生むと云ふ、當時印度人の常識なり、佛敎の創説には非ず

深妙の音調を發し、よく衆心を歡喜させん。諸の天子、天女、釋梵諸天も來集して、喜んで深妙音の說法を聞かん。諸の龍神、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾闥婆女、阿修羅、阿修羅女、迦樓羅、迦樓羅女、緊那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女も、皆來りて親近し、恭敬供養せん。また僧俗男女、國王王子、群臣眷屬、及小轉輪王、大轉輪王、寶女の千子、内外の眷屬も、各宮殿に來じて來り、俱に教を聽かん。この人よく演説するがゆゑに、貴族富豪及國內の人民が、終生隨從して好き供養をなさん。諸の聲聞、緣覺、菩薩、及諸佛も常に樂つてこの人を見たまはん。またこの人の在所には諸佛が向つて法を説かせたまふべし。諸佛に護念されつゝ、一切の教を會得し、益々深妙音調を出して說法することを得ん。これ蓮華經を受持し、説の如く修行する功德なり。

- 一、舌根清淨にして惡味なく 醜惡苦澁の飲食も 清淨の舌に妙音を發し
- 食へば悉皆甘露ならん 因緣譬論もて說法すれば 聞く者歡喜し供養せん
- 二、妙音三千世界に響き 輪王千子眷屬も

六 偈

五
瑠璃に映るが如く、
にこりなく清き心にみがかれて
身こそよすみの鏡なりけれ
(後成)

常に合掌して教を聞き 梵天、魔王、自在天
諸天、龍神、夜叉、阿修羅も 來りて恭敬し法を聞かん
羅刹、毗舍闍鬼歡喜して 樂つて來り供養せん
三、諸佛菩薩もこの法師の 說法音を聞しめし
常に念じて守護を垂れ しはれば御身を現じたまはん

六 「身の清淨を言はゞ。法師の身清淨にして瑠璃の如く、衆皆見ることを樂げん。三千大千世界の一切衆生が生死する時、その貴賤、美醜、善惡の業報、悉く法師の身に現れん。下は阿鼻より上は有頂まで、有らゆる衆生が悉く身に映像し、聲聞、緣覺、菩薩の修行せるも、諸佛の說法なしたまへるも、また皆身中にその色像を現さん。」

- 一、瑠璃の如きの清淨身 見る人歡喜せぬはなし
- 諸の色像の 明鏡に映るが如く
- 世間の有りどあらゆるもの 皆持經者の身に映じ
- 餘の人の見ぬ所をも 獨り自らよく知らん

一切衆生に敬はれ
分別説法する力は

千歳善巧語言もて
如説修行の功德なり

第三十三章 不輕菩薩の持經

第三十三章

前に説きし一第九卷第一七一の
及第十七卷四にあり
實例一この御説で何を放るるか
と云ふに正法滅びて佛道知るに
由なき世なりとも努力次第では
蓮華經に達ひより正法を復興せ
しめ得るじ云ふ事である。前三
十二卷まで如來滅後持經と如説
修行を奨励されたが、今その諸指
りとしてこのお説が出た。道な
き所に道を開かせんとし蓮華に
逢ふまでの苦心並に達ふて後の
受持。試中嚴格な教訓あり。

法を求めき。正しき佛法に至ら
んと努めた。偏ひ難き阿耨多羅
三三昧するは無量なるべし。お
説と説誦せず。チャブヤクと

一 佛は得大勢菩薩に告げたまふ。汝知るべし。僧俗男女等、もし蓮華經を受
持する人を惡口罵詈誶誘せば、大罪報あらんこと、前に説きしが如し。もしよ
く受持し、説の如く修行せば、眼耳鼻舌身意清淨の功德を得んこと、今説ける
が如し。得大勢よ。我汝がために、一の實例を語らん。

二 往古、無量無邊不可思議劫に佛おはしき、威音王如來佛世尊と號す。代を
離衰と名け、國を大成と曰ふ。天神諸人を教導するに、賢明を求むる者のた
めには、四諦を説き、緣覺を求むる者のためには、十二因縁を説き、菩薩を求
むる者のためには、六達道を説き、皆等しく一佛道に精進させ、佛慧を究竟せ

しめたまひき。得大勢よ。威音王佛の在世は四十萬億無量恒河沙劫にして、正
法住世は一天下微塵劫、像法住世は四天下微塵劫なりき。正法像法滅盡の後、
次に同じ國土に出でませし佛、また威音王如來佛世尊と號し、佛壽並に正像法
の住世も亦前の佛の如くなりき。

經を愛讀して教に親むは必要の
事ならずや。尊經は元も南蓮華
經を説誦せざるは持經訓違反ま
るが如何。當時蓮華經など見付
からなかつたか。また持經訓に
は蓮華經を聞かざる者は菩薩行
を行じ得ずとあり。不輕は蓮華
經を知らずと云うして有効に普
薩道を行する積りの疑問
但行禮拜一何ぞ是は、多分一切
衆生悉有佛性が先入主となつて
その佛性を佛なりとして拜んで
であらう。然し蓮華の教では佛
性は縁に依て生ずる本佛を説と
せされば人に佛性は生じない。
佛に親近供養して」と云ふこ
とが佛性有りき云ふ前の必要條
件である。但行禮拜は疑問。尤
も佛子を通して佛性を蒙る心
は斷むべし。奉へばこそ後回蓮
華經に値ふなり

かくて二萬億の威音王佛が順次に出現ありしが、最初の威音王佛の滅度の後、
正法滅して、像法卒うじて住する時、増上慢の僧大に跋扈せり。時に、一人の
菩薩僧あり、常不輕と名く。得大勢よ。この僧は佛法の隱没せんことを歎き、
所信の最善を致して正法を求めき。凡そ佛徒を見れば、そが僧俗をると男女た
るとを擇まず、常に禮拜讚歎して「我深く汝等を敬ふ、敬て輕慢せず、如何と
なれば、汝等は皆菩薩の道を行じて成佛すべき人なればなり」と言ふ。而もこ
の僧は専ら經典を讀誦せずして、但だ禮拜を行せり。もし遠く四衆を見れば、
また故に往いて禮拜讚歎し、「我敢て汝等を輕めず、汝等は皆成佛すべき人なれ
ばなり」と言ふ。四衆の中に心不淨にして、瞋恚を生ずるものあり。不輕を捕
へて、「この愚僧、何所より來れる。恣に我等に向つて、我汝等を輕めず」と言

み、妄に 汝等は成佛すべし」と唱ふ。我はかゝる虚妄の授記を用ひず」と、散々に惡口罵詈す。この僧は多年の間、是の如く罵詈さるれども、瞋恚を生ぜず、常に四衆に向つて、『汝は成佛すべき人なり』と言ひ、時に或は杖木瓦石を以て打擲するものあれば、避け走り遠く止り、是は高聲に唱へて、『我敢て汝等を輕慢せず、汝等は皆成佛すべき人なればなり』と言ふ。是の如く常に言へるがゆゑに、増上慢の四衆がこの僧を常不輕と呼べり。

三 常不輕は四衆を調伏せんと努めしも、効果を見ずして、命終せんとす。時に虚空に聲あり。先に威音王佛の説かせたまひし蓮華經の二十千萬億の偈なりき。不輕は具に聞いて悟る所あり。それより蓮華經を悉く受持し讀誦することとなれり。蓮華經を受持したるの功德に依り、不輕は眼耳鼻舌身意の清淨を得て、二百萬億無量歳の壽命を増し、大なる能力を以て、廣く人のために、この經を説き、千萬億の衆生を教化して、皆無上道に住せしめき。先にこの僧を賤みて不輕と呼び、惡口罵詈せし増上慢の四衆等は、不輕が持經者と成りても、猶之を輕蔑し惡口せしが、その大神通力、衆說辯力、大辯定力を得たるを以て

具に聞いて悟る。如上には善き教誨を施して居た。不輕が死む前も佛の遺教を授けしる善氣は翻はれて天分善き教を聞いた。之を更に聞いて直に悟り受持したのは懐かつ心、經文を誦誦せず、但行禮拜、は三に安考し悟つた。回柱の疑問回すから斷決す。猶之を輕蔑し持經者としての不輕を惡口せしは此の少聞聞なり。されど國の如く千劫地獄の罪を得たのである。但行禮拜時の惡口罵詈は計爾外としてもこの罪あり第十七卷回持經の法師を惡口するの罪。

信伏隨從一 經也も説ますたは釋釋する不輕を惡罵しは過重罪を受持し漸く説き大神通力善の人格成れる不輕には信伏した。釋も不思議を説哉。

その説法を聞き、皆信伏隨從せり。不輕菩薩はやがて命終したりしが、後二千億の佛に値ひ上ることを得たり。その佛は皆同一號にして、日月燈明佛と名く。不輕菩薩はこの諸佛の法威の下に於ても、常に蓮華經を説き、この因縁を以てまた二千億の佛に値ひ上りしが、その佛はまた皆同一號にして、雲自在燈王佛と名く。この諸佛の法威の下に於ても、不輕菩薩は蓮華經を受持し、常に六根清淨の力を以て、四衆のために解説し、畏る、所なかりき。得大勢よ。常不輕菩薩は、是の如く多くの佛を供養し、恭敬、尊重、讚歎して、諸の善根を植ゑ、また千萬億の佛に値ひ上り、その法威の下に蓮華經を受持し、解説せしかば、功德成滿して、遂に作佛することを得たり。

四 得大勢よ。その時の不輕菩薩とは豈に別人ならんや、今の我釋迦牟尼佛なり、我もし宿世に於て、蓮華經を受持し、讀誦し、他人のために説くことなかりせば、我は疾く無上覺を得る能はざりしならん。幸にして先佛の蓮華を聞き、始めて佛の威徳を仰がされば、正法復興せず、菩薩行も効なく、成佛も叶はず

宿世一 虚空の聲を聞きて蓮華經を受持して以來より、蓮華を知らず經を説かずして但行禮拜せしの時を以て、爾來二千萬億の威音王佛二十億の日月燈明佛及び千萬億の諸佛出現するほどの長時を以て宿世と言ふ。菩薩行も効なく、第十七卷回持經を聞かすは菩薩行を行じ得ず事もあり、蓮華三尊形の外

れたら道は無い。
 疾く、こんな長い間御修行に
 てそれを疾くと仰る。疾くも
 遅くも比較の問題。佛教は永が
 永い。
 親の如く修行。人の佛性を拜
 む位は本当の如説修行にあらず
 お経を受持誦する必要ありと
 て佛は御自身の夫取より成知へ
 の経論を語られた。第十七章の
 持経訓を誦説すること今に及
 んだか終りに當つて念のため佛
 性増上慢を戒め、一辺を偏ぶるに
 急にして全体を正愼念せざるの
 不可なることを持経の意味の如
 くに厳格なるかを教へたまふ。

一、佛

親のおとづれもかなー切衆生は
 佛子だと聞いたら直ぐにその親
 愛しと思ふのか自然の人情であ
 る。世の善信でもと頼みので
 ある。俺は佛子だほいんだと思
 ふのみではいけない。不輕の人
 情も実は親の音信懐しかったに
 違いない。能情は達せられて五
 項の如く大親の話を聞いた。

と悟り。但行禮拜の不具足を改め、よくこの經を受持し、讀誦し、人のために
 説き、世々應現の諸佛に親近し、その威徳に依て説の如く修行せしがゆゑに、
 我は疾く無上覺を得たり。かの瞋恚の意を以て、我を輕賤せし増上慢の四衆は、
 二百億劫、佛に値ひ上らず、僧を見ず、教を聞かず、阿鼻地獄に墮ちて、十劫
 の間大苦惱を受けたり。彼等が再び我に遇ひて無上道に教化されしは、地獄に
 於て、罪障を消滅し畢りたる後の事なり。得大勢よ。その時の四衆とは、驚く
 勿れ、この會中の跋陀婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の僧、尼思佛等の
 五百の信士、今已に無上道に住して退轉なき人々なり。
 得大勢よ。蓮華經は大に諸の菩薩を利益して、よく無上覺を得さす。この故
 に、菩薩たらん者、如來の滅後に於て、常に蓮華經を受持し、讀誦し、解説、
 書寫して、説の如く修行すべし。

一、人は皆

戀しき親のおとづれもがな

二、姓古威音王佛

無量智をもて衆を度し

佛の子ぞと聞くからに

- 世を安穩に守りたまへば 諸天龍神歡喜して
- 佛を供養し上れり 然るに佛の滅度の後
- 世は末世に及びぬれば 四衆は邪見を増長し
- 天人うたゝ福を減じ 衆生再び苦に悩みぬ
- 三、不輕と呼ばれし若き僧 この有様を痛く歎き
- かゝる不祥の世と成れるは 邪智の惡僧恣に
- 佛の法を亂るゆゑなり 我佛道を學ぶと雖も
- これ等非法の人々を 降伏すること能はずは
- 懈怠の咎免れじ かねて念ずる法門を
- 行じて見んはこの時ぞと 勇んで坊を立ち出でけり
- 四、群集の中に僧徒を見出で 不輕は近寄りまのあたり
- 汝は菩薩の道を行じ 成佛すべき者なれば
- 我汝等を輕めずと 唱へて合掌禮拜せり
- 諸人却つて怒をまし 不輕を罵り打擲すれば

- 不輕は過去の謗法の思ひて恨むる氣色なく常の如くに街に立ち
- 五、忍受到罪障消滅し遠く虚空に聲ありて妙法蓮華經
- 聞いて不輕は受け持ち即ち六根清淨に神通智慧の力もて無量の衆を教化して
- 六、不輕菩薩は命終の後も常に蓮華を説きしゆゑ漸く妙の功德を累ねかの不輕とは誰やらん
- 罪を贖ふ道なりと心に忍辱の鎧を着
- 四衆を禮拜讃歎せり命終せんとする時しも妙法蓮華經
- 一切衆生の大親の放
- 廣くこの經を説きしかば二百萬億歳壽命を延べ増上慢を打伏し
- 皆佛道に歸せしめたり無數の佛を供養して愈々福を得、力を増し疾く佛道を成就しき今の我釋迦牟尼佛なり

九、
 億々乃至不可思議劫一不輕が法を求め値ひ難き蓮華に値ひまての堪忍言はたしきもので有つたあの場合はあれより仕方があるまいかとすべきである。値ひて道に受持せし彼（佛様）は賢明で有つた。

- 七、禮拜授記を怪みて不輕菩薩の化を受けて増上慢の人々とは五百の菩薩四部の衆
- 八、我も蓮華を聞かざりし前は佛の功德を説かざりしゆゑ逆はるるも猶忍び妙法蓮華に値ひ上り皆それぞれ著を捨て
- 九、億々乃至不可思議劫億々乃至不可思議劫されば行香は佛滅度後に疑惑を起すこと勿れ常に佛と俱に住み
- 惡口罵詈せしが縁となり佛の道に隨ひし今わが前に集れる信心堅固の道士なり名のみ菩薩の道と唱へ惡口罵詈されしぞかし禮拜せしむまた縁なれや開示して人を教へしかば世々この經を持ちたり
- たまたま蓮華を聞き得べし諸佛は希に説きたまふかかる貴き經を聞き信じて廣く説く者は己が作佛も速かるべし

分身の所在の國土一娑婆世界以外の國土を指す。第十九卷の佛敎にて娑婆國土と要求され之に答ふる第二十二卷の菩薩者一人も娑婆世界に合格せざりき。地涌の菩薩は過去久遠劫佛魔變の持經者にして將來も亦然らんと娑婆獨白の自信あり。かの未許可菩薩者の大望を氣の毒に思ひ今彼等がために憍驕すむなり。故に娑婆と言はず分身の國と告ふ。差別的菩薩なり。我等も亦一も亦とは地涌以外の地涌もの也。

眞淨大法一眞淨とは完全理想的の義。因縁果報の道理發行證の實際等佛の智慧に指りかたぎたる塵々の結縛四十餘年説法の徳目悉くその中に括さるる云ふ。廣汎なる内容に整備調師せる厳格なる意味の蓮華なり。何故にこの語を用ひしかと言ふに今不經菩薩が初の経典三讀誦せざりし間は思惟見解未備にて正法復興運動の難かりし事に恐懼して斯の如く兩心深き語を發したるである。抑も蓮華は三位一心法蔵の下に一佛道を進行する社會思想にして大佛の輪郭は第六

第三十四章 本佛の威容、總勸持

一 その時に、千世界微塵等の地涌大菩薩は皆已にこの娑婆世界の持經者たりし身分なれば、己がためには請ふべき事なけれども、古參として餘の一切大衆を代表し、佛前にうち揃ひ、一心に合掌し、尊顔を仰いで白す。「世尊よ。我等は佛の滅後、世尊の分身の所在の國土、又は滅度の處にて、廣く蓮華經を説くべし。我等も亦自らこの眞淨の大法を得て、受持し、講誦し、解説書寫し、供養し上らんことを希望して已まざる者なり」。

二 佛は慈願麗しく、文殊師利等、舊く娑婆世界に住せる、無量百千萬億の菩薩、及諸の四衆天神人非人等、一切大衆の前に、大神力を現じたまふ。長廣舌を出して、梵天に付け、一切の毛孔より、無數色の光を放つて、徧く十方世界を照したまへば、寶樹下師子座の諸佛もまた俱に是の如き大神力を現じたまふ。この間百千歳に満ちて、皆漸く舌相を攝め、一時に警效し、俱に彈指したまふ。

章四の如く究所は第二十八卷の如く信願の相は第三十卷の如くであるがその内容は無盡ある。茲に表れる名字だけでも佛の智慧法力來至住大慈大悲入陪示開佛種の方便一相一味救護救世父法王安樂處度脱救世の救護等々衆生の發道心敬信救世の願諸道六度一佛道無上道寶所眞實信心願樂佛子の自覺親近供養三軌而別悲慕渴仰恩德普護法持持功德法師の標榜成師等々遠善美徳が山ある詳細は數へ切れぬ経典に親んで文々に感得する外ない。是等を忘れずは蓮華の思想價值が貧弱に成る。故に地涌代表は眞淨大法を受持講誦解説書寫と申して佛の御意を通達した。但し是は法師に關する事である一般信者に左様に八益しする訳ではあるまい。

長廣舌一印度人の風習として眞実を語つた後、直にペロリと舌を出す。
本佛の威容一第二十八卷で本佛を説かれたが此所は現實にその威容を顯された。宇宙の一切衆生に南無釈迦牟尼佛と拜ししめ本佛はこの通りと無言の説法を

この二音聲徧く十方世界に響き、地皆六種に震動す。その中の衆生、天神人非人等は、遙に娑婆世界に於ける菩提樹師子座上の無量無邊百千萬億の佛を見上り、また無量無邊百千萬億の菩薩、及四衆に圍繞恭敬されて、寶塔の中にまします。釋迦牟尼佛並に多寶如來を見上り、大に歡喜して、未曾有の想あり。時に、諸天は虚空の中より高聲に唱導す。「無量百千萬億不可思議の世界を越えて、彼方に世界あり、娑婆と名く。その中に佛おはし、釋迦牟尼佛と名けしる。今諸の菩薩のために、妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くる大法を説きたまふ。汝等皆深心に隨喜して、釋迦牟尼佛を禮拜供養すべし。彼の諸の衆生は、虚空の聲を聞き、皆共に合掌して娑婆世界に向ひ、「南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛」と唱へ、種々の華香瓔珞幡蓋及諸の嚴身具、珍寶妙物を遙に娑婆世界に散す。散する所の諸物十方より來ること、雲の集るが如く、變じて寶張となり、徧く諸佛の上に覆ふ。時に、十方世界は通達無礙にして、一佛土の如く、本佛の威容儼然たり。

三 その時に、世尊は上行等菩薩大衆に告げたまふ。「諸佛の神力は是の如く無

り、今地土の菩薩にまで釈迦牟尼佛から大法運轉せられんとするに先ず斯うして此土地土の區別を辨し上行等の差別的奮勵も願下げにさせたまふ。

三

上行等、一各は上行なれど實は上行を介して他方來を含む一般大衆に告げたまふのである。所有の法、第一顯說で所成の法と言ひしが第二八章に至つてこれが本佛久遠所成の法に成る久遠なるがゆゑに本來所有の法なり。此所で所有を有らゆると讀まず。

自在の神力、全能

秘要の機、全智

運轉の事、全智全能にまします

佛格、如來の體、佛味

此說法に於て、此說法即ち眞淨大法運轉に於て必要且つ十分に宣示顯說した。要約も布行も出來やしない。唯説讀して如説修行せよと言ふのである。要を取つて説讀せよと言ふは、經卷一、經卷供養は運轉を轉る所以なりと考ふべし。然し餘り考へ過ぎて運轉は本佛なりとか我等は運轉なりとかは益には佛も我等も同じだと言ひ出しては困る。折角これまでに運轉を運轉

量無邊不可思議なり。我が大法運轉は、もし斯る神力を以て、無量無邊劫に巨りてその功德を讃美せんも、なほ説き盡すこと能はじ。要を以て之を言はじ。如來の一切の所有の法、即ち如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事は、皆此說法に於て宣示顯說し已れり。この故に汝等如來の滅後に於ては、この大法を護らんがため、一心に蓮華の經を受持し、讀誦し、解説書寫し、説の如く修行すべきなり。この法護られずば、無上道行はれず、救世の誓願も空しかるべし。何國を問はず、蓮華經の受持し、讀誦し、解説書寫され、説の如く修行されん處、若くは經卷の住せん處には、そが園中たると、林中たると、樹下たると、僧坊たると、俗舎たると、殿堂たると、山谷曠野たるとの別なく、その中に塔を起てて供養せよ。この處は即ち道場なり。諸佛は此に於て無上覺を成就せらる、諸佛は此に於て說法せらる、諸佛は此に於て滅度せらる。諸佛は常に此の處を離れたまはじ。

一、諸佛救世者神通を現じ

舌相高く天に付け

衆生を歡喜させたまふ
身より無數の光を放つは

し、佛と菩薩衆土の各分を立て、三脩を説きし道も正して來たもの第一度御破準して、もこの無稽になしては何にも成らぬ。諸佛此に於て、我等も亦此に於てである。我等運轉の中に於て蓮華を轉らん本佛と大元帥と稱改上りて。

二

我を見云々諸大菩薩と住む、これ信香として一對二するなり。

わが今日に教化せる諸大菩薩、一文字讀動轉持には地涌を指す。これが三八條の文なることを見ても、この訓示が上行等地涌に與へられたものでない事が明である。總動轉の文なり。滅後の持經香は經卷を本尊とするは勿論なるが、まごか、諸菩薩を大師の體を以て見んとする一對二は至當である。この意味に於て蓮華經中の諸大菩薩を勸請してお寺に祭るも至當である。

佛道求むる人々に

警效の聲彈指の音

佛の滅後大法の

佛の滅後應世に

功德は無量無邊にて

佛の神通力をもて

三、よくこの經を持つ者は

十方諸佛を見上り

諸大菩薩と共に住み

供養し歡喜さするなり

十方諸佛も歡喜して

四、よくこの經を持つ者は

諸經の義、文字章句まで

大空を吹き行く風の

蓮華の虚妄なきを證す

十方世界を震動するは

弘通を祝ふ神變なり

蓮華の經を持つ人の

虚空の邊際なきが如く

歴劫讀むるも盡きすまじ

我を見多寶如來を見

わが今日に教化せる

常に我と多寶佛を

現在及過去將來の

この持經者を讃めたまはん

やがて諸佛の智力を得

樂説窮なきこと

障礙なきが如くならん

- 五、よくこの經を持つ者は 佛説の有らゆる經典の
因縁次第をよく知りて 義に隨つて如實に説かん
この人世間に行ずれば 日月光り曜きて
照さぬ隈もなきが如く よく衆生の闇を滅し
無量の菩薩を教化して 皆一道の士となさん
六、救世の大願を發せる智者よ こそなき功德に歡喜して
わが滅度の後の世に よくこの經を受持しなば
我が誓をも満足し 汝が願も成就せん

第三十五章 大法遺囑

一 佛は、交る交る持經誓願をなせる者に對し、未だ一人にも聽許なかりしが、
今や如上の訓示を已つて師子座より起ち、神通の御手を伸べて、無量の菩薩大

六、
救世の大願を發せる智者一第六
章同一佛道願の菩薩は皆智者なり
本佛常住を知る者は更に智者

三
無量の菩薩大菩薩一前章に於て
は上行等が百奉として御遺囑に
就き責任を以て代誓願をなした
次愈々御遺囑の時は上行の名は
加はらず、それはその皆上行等
はとうの誓願を成け、永らく已
に持經して居る者である。
修習一実行第四卷曰又は第二十
八章因田の如く、佛として實際
修行したる五ふのである。菩薩

菩薩の頂を一時に摩でて言ふ。「我は無量百千萬億不可思議劫の間、この難得の
大法を修習せり。容易く許すべきものにあらねども、已に上行等元老の誓願あ
る上は、何ぞ惜まん、今以て汝等に遺囑す。汝等各所縁の國土に於て、一心に
この法を流布し、廣く世間を利益せよ」。是の如く三たび諸の菩薩の頂を摩で
てまた言ふ。「我無量百千萬億不可思議劫に亘りて、修習せるこの難得の大法を、
今以て汝等に遺囑す。汝等如來の滅後に於て、蓮華經を受持し、讀誦し、解説、
書寫して、説の如く修行し、廣くこの大法を宣べ、普く一切衆生に聞知させよ。
如來は大慈悲あつて、諸の慳怯なく、無畏説法し、よく衆生に如來の智慧、自
然の智慧を興ふ。如來はこれ一切衆生の大施主なり。汝等また如來に學べ、教
を施すに慳怯あることなかれ。將來世の善男善女にして、如來の智慧の功德を
信ぜん者には、ために蓮華經を説き、聞知せしめて佛慧を得させよ。淺機にし
て信受せざらん者には、ために如來の餘の深妙の經を説いて示教利喜し、引導
して蓮華に入らしめよ。汝等よく是の如くせば、これ如來の恩を報するものな
り」。

三
此の佛説は善言であるが此所は
實際より従つて難得も難得の意
なり。今遺囑し候ふる場合だけ
難得と仰やるのみ。
河津の國土一邊は地涌の獨占
であるが佛は他方に任せ、と言
ふのではない。まさか親愛の阿
羅漢諸大智の舍利耶や又住娑
婆の文殊師利までも他方に遺
囑する訳ではあるまい。誰でも本
佛中心に宇宙即娑婆に往くべき
餘所はない。奉すべき餘佛はない。
如來曰地涌が大衆のために分身
所任の國土にお廣せしに對し佛
は同章曰の如く本佛の威容を
示され此土他土の護念を一掃し
て世界を統一し國を限定せず各
所縁の國土に仰せらる。思ふに
地涌は我等を擇任に出こ來たん
ではない。將來の持經者たるべ
き衆生の諸弟子を奨励のため出
て來たのである。それが先輩地
涌の後目である。佛の大慈悲の
御計らみである。されば又遠寄
住本佛の御恩を忘るること地
涌を手本とするならば誰でも軟
弱に墮落され寂滅地涌下の持經者
に成れる。それでこそ官人衛足
し本佛は大國面を告げらる。
如來の智慧の功德一佛様の有難
い蓮華四卷の如から諸佛智慧と
ありそれが法力と成つて居る。

不勝常は亦菩薩から出来上つて居る。第二十八章(三)にて知るべし。つまり如来の一切の所有の法になるのである。難信難解なるも此所である。如来の智慧の功徳を敬信すれば運筆は分り易いのである故に是等の人に断知せしめよ。

如来の思一地涌菩薩の情操一念も思慮を忘れぬが根本。

三 我輩諸君も亦當に修行せん。一我輩諸君も亦當に修行せん。

隨所安んじ、どうも隨處御取遣いと撰授し第十八章以来の虚空會の閉會となる。

多寶佛塔還つて故の如く一扉は閉じ塔は消えた筈だと思ふ。地涌の菩薩も用済みて消えませ分身諸佛も各目的の面を離れ第十八章三光土田の式で、娑婆世界の靈寶山に成つた話

(備考)一原本はこの後に六品ある。あわは皆下根菩薩門に備ふる附録であつて今の文明には示教利善の用にも立たぬ低級なもの依て之を削除す。他日掲拾として別冊で發表紹介する考あり

二 諸の菩薩は佛の教敷を聞いて、全身大歡喜に満ち、益々恭敬を加へ、軀を曲げ頭を低れ、合掌して佛に向ひ、俱に聲を發して曰く、「世尊の教の如く、我等具に奉行せん。ただ願くば世尊よ。後を憂ひさせたまふな」と、三たび俱に是の如く誓ひき。

三 その時に、釋迦牟尼佛は、諸の菩薩の誓を嘉納あり。已に説法も、撰記も遺囑も終りたれば、今は法會を閉ぐべしとて、自ら寶塔を出でさせられ、「諸佛各隨所に安んじたまへ、多寶佛塔還つて故の如くなりたまへ」と宣したまふ。時に、寶樹下獅子座上の無量の分身諸佛、多寶佛、上行、文殊師利等の無量不可思議の菩薩、舍利弗、目連等の聲聞四衆、及一切世間の天神諸人等皆大に歡喜せり。

蓮華經 終

7.711

昭和六年九月一日初版發行
 昭和九年二月一日改訂再版發行

著者 岩野直英
 東京市中野區千光前町九

騰寫人 渡邊 佐
 東京市中野區新井町四六六

終